

公立大学法人 滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2017年度 活動報告書

はじめに

ソーシャルデザインとしての近江楽座

15年目に入った近江楽座を振り返ってみたい。地域課題に向かう意識を持つことは、社会貢献を前提とした活動姿勢に目を向けることである。学生の多くは、さまざまな情報から身の丈を超えた正義感や、使命感を持つことから地域活動を始めてしまう。まずは福祉、慈善、奉仕といった市民参加的なボランティア活動がわかりやすいイメージとなっている。近江楽座の学生たちにとっても以前は、自分たちの身近な暮らしから課題が芽生えることは少なかった。日常からは外れたイベントなどの「はれ」の活動をすることで、成果を出し、評価を受け、感謝されることで達成感を得る。それがモチベーションとなっていた。活動に参加していないことへの焦りや後ろめたさから、自発的でない自己犠牲活動へ踏み出す学生もいただろう。地域には元来相互扶助的な助け合いの慣習や伝統がある。その中によそ者として理念を抱えて飛び込んでしまう若さが学生だ。地域の理解は必要だが、学びのインキュベーション期間と考えれば、地域をフィールドに成長していくことができる。学生時代の活動は、地域に寄り添うことのできる身近な眼差しを持って、自分たちが将来必要となる暮らしの種を自分たちの手で蒔いていく作業だ。将来をイメージできる力、企画できる力を身につけて、自分たちを取り巻く次代のモノ、コト、ヒトの社会をデザインしていくための第一歩なのだ。

昨今、地域社会の課題へ対応している行政、NPO などの中間法人、民間企業、市民、そして大学・学生など、それら公と民の関係性が緩やかにつながる構造が出来上がってきた。運営財源は税金、補助金だけでなく、地域活性化ファンドやクラウドファンディングなど、間接的に活動参加できるシステムも生まれている。そして、社会という掴みどころのない言葉が「ソーシャル」という、ひと

のつながりや知や秩序が集積した環境をイメージさせる柔らかい言葉で表現されるようになり始めた。そのことで特別な人、領域だけにとどまっていた社会参加への価値観が一般化することとなった。ノブレス・オブリージュが意識され始め、欧米のエンジェル投資家を真似る人材まで出現するようになる。そしてソーシャルベンチャーと呼ばれるソーシャルビジネスが地域で雨後の筍のように起業し始めている。またこれまでの企業の多くはCSR（コーポレートソーシャルレスポンシビリティ）という取組みで社会的存在意義や企業の責任をアピールしている。今やソーシャルメディア SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）がひとのつながりやコミュニティのプラットフォームになっている。ソーシャルという言葉が満載の中、15年間さまざまな地域の中で活動を続けてきた近江楽座という取組みは、強いメッセージ性を持ったソーシャルデザインと位置づけられるだろう。

平成 31 年 2 月
近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志
(人間文化学部 生活デザイン学科)

目次

はじめに	1
1 近江楽座について	5
1-1 近江楽座とは	6
1-2 プロジェクト区分	7
1-3 プロジェクトの採択について	8
2 各プロジェクトからの活動報告	11
2-1 活動実績報告	12
2-2 『らくざしんぶん』	56
3 共通プログラムの報告	63
3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座	64
3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」	66
3-3 活動報告会 まちづくり famer's festa - まちをたがやす人たちの感謝祭 -	70
4 学生有志活動	79
4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」	80
4-2 オープンキャンパス	82
4-3 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」	83
5 他大学等との交流	85
5-1 輔仁大学との交流	86
6 情報発信	89
6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット	90
7 付録	91
7-1 プログラム推進メンバー	92
7-2 メディア掲載一覧	93

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の「スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎-」は、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

平成16年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組み支援プログラム(現代GP)」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取組みとして学内外で高く評価されました。そして、翌平成19年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、平成29年度までの14年間で延べ312のプロジェクトが地域と連携した活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局(地域共生センター)の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

活動助成システム

「スチューデントファーム「近江楽座」」として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

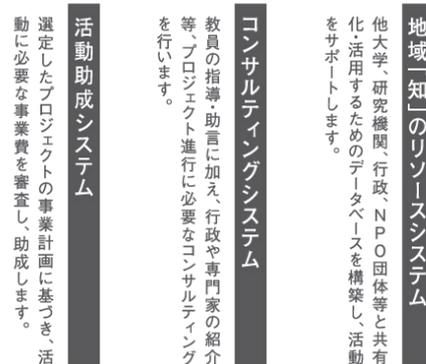
コンサルティングシステム

教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

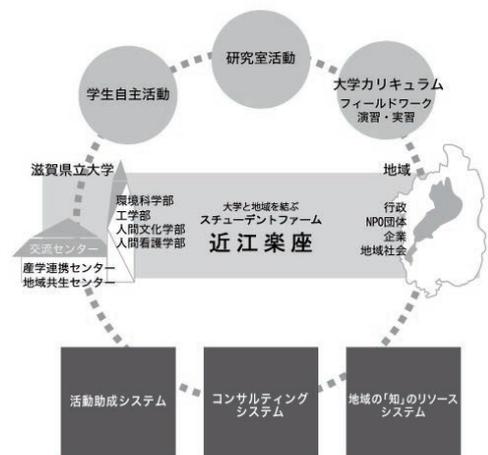
地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

<3つのサポートシステム>



<サポートシステム概念図>



1-2 プロジェクト区分

平成 19 年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「A プロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「B プロジェクト」がスタートしました。

| A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。

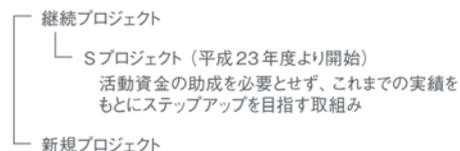
昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、さらに平成 23 年度から新たに③「S プロジェクト」として、これまでの実績をもとにステップアップを目指すプロジェクトで活動資金の助成を必要としないプロジェクト、の 3 つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

| B プロジェクト

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターがフォローし、依頼先と共同で取り組みます。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。



B プロジェクト

学生主体のチームが自治体や企業等から提示された課題に、プロポーザル方式で企画提案を行い、選定されたチームと依頼先とが共同で取り組むプロジェクト (平成19年度より開始)



1-3 プロジェクトの採択について

| プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日 時：2017年4月10日(月)～5月8日(月)

| 募集説明会

A プロジェクト
日 時：2017年4月12日(水) 12:30-13:00
場 所：講義室 A4-107

| 応募件数

A プロジェクト 23 チーム
うち継続プロジェクト 21 件
(S プロジェクト1件含む)

| プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日 時：2017年5月20日(土) 9:00-16:00
場 所：中講義室 A7-102
内 容：プレゼンテーション(プレゼンテーション
シートによるプロジェクト説明) および質
疑応答、審査(非公開)

選定委員(順不同 敬称略)：

- 滋賀県立大学 地域連携担当理事
COC+推進室長 田端克行
- 滋賀県立大学環境科学部 准教授 金子尚志
- 滋賀県立大学人間文化学部 准教授 原未来
- 暮らシフト研究所 代表 藤田知丈
- 信楽焼窯元 明山窯 石野啓太

| 採択および採択通知

A プロジェクト
日 時：2017年5月25日(木)
通知方法：近江楽座ホームページおよび学生ホー
ル掲示板にて通知

| 採択件数

A プロジェクト 22 チーム
うち継続プロジェクト 21 件
(S プロジェクト1件含む)

| 活動説明会

A プロジェクト
日時：2017年6月1日(木) 12:20-13:00
場所：講義室 A4-107
内容：採択プロジェクト代表者に対する事業計画、
会計処理等の進め方に関する説明会

2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

01	あかりんちゅ	12
02	未来看護塾	14
03	BAMBOO HOUSE PROJECT	16
04	とよさと快蔵プロジェクト	18
05	信・楽・人-shigaraki field gallery project-	20
06	政所茶レン茶 ^ゝ ー	22
07	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト	24
08	地域博物館プロジェクト	26
09	座・沖島	28
10	かみおかべ古民家活用計画-SLEEPING BEAUTY-	30
11	たのうらまちづくりプロジェクト	32
12	とよさらだプロジェクト	34
13	木興プロジェクト	36
14	人と環境を救う雨水タンク	38
15	木之本こじへいプロジェクト	40
16	フラワーエネルギー「なの・わり」	42
17	おとくらプロジェクト	44
18	内湖の再生と地域の水辺コーディネート	46
19	男鬼楽座	48
20	タクロバン復興支援プロジェクト	50
21	Taga-Town-Project	52
22	たけともミライ	54

次ページ以降のチームデータについて補足説明

※近江楽座活動年度について

□ : 不参加

■ : 参加

を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総数です。

01 あかりんちゅ



エコでスローな夜を

お寺などから使えなくなったろうそく「残ろう」をいただき、それを再利用してリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイト、キャンドル作り教室、キャンドル販売などを行っています。自分たちで資金をまかない、独自予算で活動している唯一のSプロジェクトです。

TEAM DATA

チーム名：あかりんちゅ
代表者：大橋日菜子（人間文化学部）
メンバー数：9名
指導教員：平山奈央子（環境科学部）
活動場所：学内、彦根市、滋賀県、県外
関係団体：ひこねキャンドルナイト実行委員会
近江楽座活動年度：

2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
2011	2012	2013	2014	2015	2016	

PROJECT

実施事業

- (1) ティーライトキャンドルの製造委託
- (2) ミツマルシェ
- (3) 湖風祭



キャンドル作り教室 (11/11)

- (4) OKB キャンドルナイト
★見出し写真：OKB キャンドルナイト (12/08)
- (5) 開出今団地 Xmas イベント



ハンドベル演奏 (12/17)

- (6) 商品制作・開発
- (7) 湖風夏祭
- (8) 豊郷地藏盆キャンドルナイト

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

本年度は現3回生が活動をやめ、2回生3人だけのスタートとなった。前年度は現4回生がほとんどのイベントで中心となっていたため、幹部職を引き継いだはよいものの、どうしていけばいいのか、あかりんちゅの宣伝はどうやっていくべきなのかということをしつかり掴めておらず、最初は手探り状態であった。そこから同じ学科の友人たちに声をかけ、入学式の配布物であかりんちゅの存在を知った1回生が2人入ってきてくれて、ようやく9人まで人数を増やすことができた。ただし、完全に軌道に乗り出したのは後期からだと思う。前期はほとんどイベントがなかったということもあるが、メンバー間の結びつきがあまりなく、いくつかイベントをこなしていくうちに全員がペースをつかみ始め、後期に入ってからようやく安定したと感じた。

課題としては、あかりんちゅの宣伝不足によるイベントの少なさと制作日が少なかったことである。イベントの少なさということに関しては宣伝不足もあるが、他団体のリーダーと学年が違い、気軽にイベントの提案が出来なかった、ということも要因としてある。制作については、どの程度制作日を設ければいいのかということが分からず、以前の制作拠点で行うモチベーションが上がらなかったことが原因だ。

次年度はあかりんちゅの全メンバーが活動2年目以上になるので、宣伝の余裕も出てくるだろうし、制作拠点が変わったのでモチベーションも上がっている。現時点でメンバーがやめるということは無いようなので、全員の結びつきが強いま、来年度を迎える。つまり、今年以上の活動ができる見込みである。目標としては反省点を改善すること、個人の能力をより生かせる活動をすることである。

活動を通して学んだこと (抜粋)

あかりんちゅは大学での活動だけでなく、外に出て地域の方々と関わりながら行うキャンドルづくり体験などとても活動的です。来てくれる子ども達は皆楽しそうに行っていてこちらまで暖かな気持ちになりました。湖風祭もとても盛り上がり、これから多くの方が来てくれるよう笑顔で対応することを心掛けたいです。

矢島美菜子 (地域文化学科 2 回生)

今年から所属し慣れないことも多かったですが、良い経験をすることができました。湖風祭で販売するキャンドルは夏と冬で種類が違うため色々な種類のキャンドルを作ることができて楽しかったです。地域の方々と上手く対応できない場面があったので今後は緊張せずにこなせるようになりたいです。

関しおり (地域文化学科 1 回生)

今年度は開出今団地に新しく拠点を構えたことで、地域の人との交流が深まった。また、参加者の方から初めてやりたい活動内容を提案していただけた。新しい活動が増えた一方で、日程が合わず行えなかったものもあるので、次年度は先方との日程調節を行い、活動を行えるようにしたい。

小寺真央 (地域文化学科 2 回生)

地域からのコメント (抜粋)

滋賀教区浄土宗青年会 第 24 期会長 小川直人さん

滋賀県内浄土宗寺院所属の青年僧の団体であります本会では、貴会創設当初よりご縁をいただいております。お寺から出る残燭の有効活用を模索する中で「灯り」を用いた活動を展開されている事を知り、当会より協力依頼をお願いしました。

特に当会で開催しました東日本大震災追悼法要の中では、本堂や境内でキャンドルを灯し、またハンドベル演奏により物故者への追悼の誠を捧げていただきました。近年の事業報告を拝見し、より一層に活動の充実を感じ、微力ながら活動に携わっている事に喜びを感じております。毎年体制が変わり、一年ではやり遂げられない想いもあると思いますが、先輩達が繋いでくれたあかりんちゅを皆で育てていき、後輩達と共有し、継続する事の大切さも感じ、皆さんで力を合わせ「灯り」で過ごす『エコでスローな夜』をより一層広めていってほしいと思います。 合掌

指導教員より (抜粋)

環境科学部 平山奈央子

人出不足など昨年度の課題に対応してメンバーを増やし、無理のない活動を実施しているように見受けられました。ただし、活動メンバーの所属が全て同じであることと、学内の他団体や地域の団体との繋がり作りに少し課題があるようです。異なる学科のメンバーがいることで視野を広げたり、新しい活動が可能になったりすることもあると思います。特に、キャンドルナイトは空間デザインであることから、それらをどう配置するか、魅せる空間づくりを考える仲間を増やすなどをしてみてはどうでしょうか。また、地域の団体との繋がり作りについては、より具体的に依頼の受付方法やあかりんちゅが何をできるのかなどを発信していく必要があると思います。時には、あかりんちゅと一緒に活動したい団体に対して企画提案をする事も大事だと思います。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



アロマキャンドル
グラデーションキャンドル

02 未来看護塾



地域で活躍する看護学生

子どもや高齢者、障がいの有無に関わらず、ボランティアを通して地域の方々が心身ともに健康になってもらえるよう活動しています。様々な人とのふれあいの中でコミュニケーション能力や健康についての知識など、将来に必要な力を自然に身につけていきます。

TEAM DATA

チーム名：未来看護塾

代表者：廣瀬明日香（人間看護学部）

メンバー数：92名

指導教員：伊丹君和、関恵子、川端愛野（人間看護学部）

活動場所：学内、彦根市、宮城県南三陸町歌津地区田の浦

関係団体：彦根市立病院、NPO法人ぼぼハウス、どんぐり保育園

近江楽座活動年度：

2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
2011	2012	2013	2014	2015	2016	

PROJECT

実施事業

- (1) 彦根市立病院まつり「ちびっこ広場」



病院まつり（05/27）

- (2) 湖風祭での「ちびっこ広場」
- (3) 荒神山で小学生と遊ぶボランティア
- (4) 森の子保育園夏祭り
- (5) 野瀬町地藏盆への参加
- (6) 野瀬町長寿会への参加
- (7) ビバシティ彦根
「応援！生き活き健康生活！」
- (8) 宮城県南三陸町「生き活き健康広場」
★見出し写真：田の浦生き活き健康広場（09/24）
- (9) ぼぼハウスのイベントスタッフボランティア
- (10) ぼぼハウス主催の卒業式のスタッフボランティア

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

ビバシティ彦根でのイベントでは、1～4回生が学びの目的をしっかりと持って参加することが出来た。さらに教諭や卒業生と共にイベントを実施できたため、看護職としてのコミュニケーションの取り方や、専門性の高い知識や技術を間近で学ぶことができた。

1年を通して最も大きな事業であった田の浦生き活き健康広場では、学生が主体となり、当日の活動を企画し、皆で協力し、成功に導くことが出来た。そのため、自身で物事を考える企画力や実行力、主体性、協調性などの力をそれぞれが伸ばす事が出来たと考える。滋賀とは遠く離れた被災地で生活されておられる現地の方と交流させて頂くことで、地域間による看護のニーズの差異を学生一人一人が考えることが出来た。学内だけでは得られない大きな学びを与え続けてくださっているこの田の浦の方々との『関わり』を今後も大事にしていき、みなさんとともに健康に、今後も生き活きとした時間を過ごしていきたい。

課題としては、毎年挙げられているように参加率の減少がみられたことだ。対策として、積極的にミーティングやLINEなどの連絡ツールで声をかけ、参加する生徒が偏らないよう心がけた。また、活動に参加しやすいように、初活動の際はコアメンバーと一緒に活動を行うようにした。まだ全部の活動に参加していないメンバーには、他の活動にも興味を持ってもらうように働きかける、新しい活動を考える、SNSで情報を共有するといったことを今後も継続して行っていく。また、活動することの意義を所属メンバーに理解してもらい、地域で活動することで学びを得、今後活かされる経験が出来るよう、参加へのきっかけづくりをしていく必要があると考える。

活動を通して学んだこと

老若男女、疾病や障がいの有無、年齢、世代を問わず多くの方々と交流させて頂いた。その過程でコミュニケーション能力や豊かな人間性を育むことが出来た。未来看護塾の活動を通して、看護職を将来目指すうえでかけがえのない経験が出来たと考える。

廣瀬明日香（人間看護学科2回生）

様々な世代の方と関わることでコミュニケーション能力を身につけることが出来ました。また、地域の中で施設がどのような役割を担っているのかを定期的なボランティア活動を通して間近に感じる事が出来ました。

上田和葉（人間看護学科2回生）

看護という視点に限らず、さまざまな施設やイベントで幅広い関わり方を学ぶことができた。さまざまな年代の人と交流する中で相手の気持ちを考えて発言・行動することはとても難しいことだが、ありがとうという言葉や笑顔で応えてもらえることや、いい達成感を感じられた。

濱田桃香（人間看護学科2回生）

施設に一年間行ったことで、子どもたちの成長や接し方を学ぶことが出来た。また、様々な年代の人たちと関わり、その人たちに応じた個性のある接し方をすることの難しさを学んだ。

石井宏実（人間看護学科2回生）

地域からのコメント

野瀬町子ども会会長 尾田清美さん

未来看護塾の皆さんには地蔵盆で子どもたちと遊んで下さったり、防災訓練では先生たちと一緒に車椅子での移動の仕方や包帯法など教えてもらったり、本当にありがたいです。これからもどうぞよろしくお願いいたします

指導教員より（抜粋） 人間看護学部 伊丹君和

未来看護塾は、結成以来14年間途絶えることなく、「近江楽座」のプロジェクトチームとして活動を継続しています。

病院やNPO ぽぽハウス、保育園などでの定期的な活動はもちろんのこと、「生き生き健康支援活動」における健康チェックやハンドマッサージ、足浴の提供などを実施し、地域住民の心と身体の健康、ネットワークづくりを目指して日々奮闘しています。ビバシティ彦根における「応援！生き生き健康生活」では卒業生たちの協力も得て、防災・健康イベントを毎年行っています。被災地である宮城県南三陸町における健康交流活動も継続しており、学生たちは被災地の方々笑顔と元気を交換し合っています。

このような「近江楽座」の活動は、地域課題の解決とともに、学生の自ら学ぶ力、それぞれの専門分野への興味・関心や知識・技術を高めるものであり、教育的な効果も大きいと考えています。各プロジェクトにおける学生間の縦と横のつながりの関係性はもちろん、地域住民との関係性など、自ずと社会性やコミュニケーション力の向上にもつながります。また、悩み試行錯誤を重ねながら企画実施する中で、実行力と豊かな感性をも育んでいます。学生の教育効果と地域貢献の両者が結びついた「近江楽座」、そして「未来看護塾」の益々の発展と継続を望むとともに、これからも支援していきます。

DELIVERABLE 成果物／制作物



活動パネル（夏湖風祭）



活動パネル（病院祭り）

03 BAMBOO HOUSE PROJECT



生きる自然は地域を育む！！

全国、どこにでもある放置竹林。この問題を地域の方々と学生が協力して解決しようという取り組みです。滋賀県湖南市菩提寺区の竹林で、毎年竹林整備を行い、その際に出た竹廃材を再利用し、こどもや地域の方々が集まる憩いの場となることを目指します。

TEAM DATA

チーム名：BAMBOO HOUSE PROJECT

代表者：本田山成昭（環境科学部）

メンバー数：25名

指導教員：陶器浩一（環境科学部）

活動場所：湖南市菩提寺

関係団体：菩提寺まちづくり協議会

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) 竹廃材の撤去（竹チップ制作）



竹廃材の撤去（06/02）

- (2) 竹建築補修

- (3) 「竹の庭」竹林見学会



竹林見学会（06/04）

- (4) 春ワークショップ

★見出し写真：春ワークショップ（03/14）

- (5) 環境学習講話

- (6) 甲西北中学校合同竹林整備

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

このプロジェクトは、継続した活動が重要である。

まず4月に菩提寺まちづくり協議会地域活性化委員会の皆様と1年間の活動内容の共有を行い、6月に竹廃材の処理や竹建築の補修を学生と地域の方々と一緒に行うことができた。竹廃材の処理も学生が協力して行うようになって2年目で、昨年同様継続して行った。さらに、この機会を利用して、今年度は新たに竹建築のメンテナンスを行うことができた。

春WSでは、今年度は新たな試みとして、竹建築の解体・再構築を行い、バンブーハウス1号を始め「竹の庭」の大きな転換期となった。竹建築の「解体」というフェーズに今年始めて達し、どのように解体をデザインするかを考えた。ただ、建築を解体し更地にするのではなく、段階的に解体・再構築することで、既存の建築を残しながらも、新たな場所を築いていく。姿・形は変わっていくが、「竹の庭」は地域に寄り添いながら今後も続いていくように考える。

今年度で2年目となる甲西北中学校との環境学習講和と合同竹林整備は予定していた時期とは異なるが、3月に実施した。中学生にBAMBOO HOUSE PROJECTの活動「竹の庭」について知ってもらい、竹林整備を通して地域の人々にとって愛着ある場になるように努めた。環境学習講和の際に、バンブーハウスを知っているか訪ねたところ、半数以上の生徒が知らなかった。しかし、プレゼンを聞き、また竹林整備を一緒に行っていく中で、「また遊びにきたい」「次も手伝いたい」などという声があり、多くの中学生に愛着を持ってもらえたといえる。

この「竹の庭」が地域の人々に愛され、地域に寄り添ってこの場が続いていくように、これからも継続して活動を行いたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

竹林環境の維持にどれだけの労力が必要になるのか学んだ。竹は成長速度が早く手入れをしないとすぐに生えてきてしまう。薄暗い場所であった竹林が、現在、木漏れ日が入りとても魅力的な場所になっている。先輩方の努力と町の方々の努力無しには出来ないことで、自分もこの活動を続けていきたいと感じた。

中尾貴之 (環境建築デザイン学科 2 回生)

金物を使わずロープとガムテープのみで建築を形成するという原始的な方法が魅力的に感じられ参加している。今回はこれまでに制作したものの補修、改修、解体を行った。竹林で竹建築を制作することで伐採、制作、解体という早いサイクルを容易に循環させ、更新し続けられる。

山崎稜 (建築デザイン学科 2 回生)

学んだことは2つある。1つは、計画性の大切さである。終わりを見据えて、どのようにアプローチするかを常に考える柔軟な頭が必要とされた。もう1つは、立ち振る舞いである。人に指示する立場として関わってきたため、自分がどのように見られているか、そしてどのように見せるべきかを考えることが大切になる。

小川拓真 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント

湖南省菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員会 保田芳利さん

滋賀県立大学のバンブープロジェクトの方々、竹林を整備していただき6年が経過しました。バンブーハウスの建設をはじめ、竹のトンネル、ブリッジ、スクリーン広場、遊具等多くの施設を建設してくださりました。今年はこちらの施設の安全面を主体とした保守管理を行っていただきました。

竹林が地域住民の憩いの場に生まれかわり、季節には自治会単位でタケノコ掘りを楽しみ、地域住民の絆づくりにも役立っています。これからも、継続してこの事業に取り組んでいただければ嬉しく思います。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 陶器浩一

今年度も、地元中学校との交流、およびWSでは傷んだ箇所を補修を中心に場所の整備を行った。

中学校との交流では、学生代表が中学校に出向いて講義講演を行い、3月には授業として生徒たちが竹林に来てくれた。講義および竹林案内において、竹林整備を通じて環境問題と地域コミュニティについて中学生に説く学生たちが頼もしい。学生たちの真摯な姿勢に、中学校の先生方も信頼を置いてくれているようである。

3月のWSでは、6年前に築いた「バンブー1号」の傷んだ屋根を撤去して、新たな場所として再生させた。全体として傷んだ部分の撤去や補修が中心の作業であったが、生まれ変わった場所を見て、皆達成感を覚えていたようである。

まちづくり協議会の中には管理上の問題や予算の問題などを指摘する声もあるようだが、地域活性化委員会の方々も熱心に説いてくださっている。

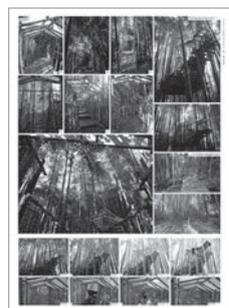
WS中にも、小学生が友達同士でふらっと遊びに来たり、親子で遊びに来られる姿を見かけ、地域の場として馴染んできていることを感じた。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



環境講話の授業プリント



春ワークショップで補修、解体・再構築した竹建築

04 とよさと快蔵プロジェクト



古民家改修でまちを豊かに

使われなくなった民家や蔵が点在する豊郷町で、空き家をまちの資産として活用し、地域を盛り上げる活動を行っています。地域のイベントへの参加やイベント企画、蔵を改修したBAR運営なども行い、まちを盛り上げるまちの人をサポートしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさと快蔵プロジェクト
代表者：高田拓夢（環境科学部）
メンバー数：46名
指導教員：迫田正美（環境科学部）
活動場所：犬上郡豊郷町
関係団体：NPO 法人とよさとまちづくり委員会
近江楽座活動年度：

2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
2011	2012	2013	2014	2015	2016	

PROJECT

実施事業

- (1) だろんこまつり
- (2) タルタルーガビアガーデン
- (3) シェアハウスおやえさん改修合宿
★見出し写真：改修合宿 (09/19)
- (4) 「みちびらき」の開催



みちびらき (10/27)

- (5) 座・沖島さんとのコラボ
- (6) ミツマルシェ



ミツマルシェ (03/22)

- (7) とよさとハロウィン
- (8) 八町地藏盆

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

14年目を迎えたとよさと快蔵プロジェクトは設立当初のものとは異なる新たな動きがあると感じていた。特に今年度は建築学科、デザイン学科以外の学生も加え、今後の展開にさらなる多様性が期待される。2017年度はそうした流れを受け、来年度、再来年度のためによい緩衝材となれるような1年を目指した。例えば、7年ぶりにだろんこまつりを復活させ、町の方々との関係性を見直したり、「みちびらき」や近江楽座「座・沖島」とのコラボといった従来通りの学生のつながりから他学科の学生により広く知られるような活動を企画した。

1年を終えて、特に課題だと思う点は学生と地域の方との関係である。とよさと快蔵プロジェクトは2つの属性を持っている。まちづくりと古民家改修である。今年度の学生には改修に興味を持つ人が多く、反面まちづくりとしての活動の意義に疑問を持ち、地域の方々との関係をないがしろにしている人が多い。学生団体である以上、そのどちらかの属性に偏重してしまうのは仕方のないことだと思う。しかしそのいずれも手段であり、高次の目的を達成するためにあることを忘れてはならない。車輪は片方だけでは安定しない。この両輪をうまく回していくことが肝要である。

活動を通して学んだこと (抜粋)

初めはただ単に「古民家の改修がしたい!」という想いで参加したが、改修や豊郷町で行われるイベントに参加するうちに「とよさと快蔵プロジェクト」の楽しさに引き込まれた。4月からは代表として引っ張っていく立場となる。私がのめり込んだのと同じように後輩たちにもこの楽しさを味わってもらえるよう努力したい。

上田健太郎 (環境建築デザイン学科 2 回生)

主に学んだことは、普通に学生生活を送るだけでは経験できない、地域の人々と深く関わり、ともにまちをつくっていくということの意義深さだ。古民家の改修や、学生主体で経営を行うバー、地域のイベントなど多くの方面でまちづくりに参加でき、地域の人々と深くつながることができた。

井口陽介 (環境建築デザイン学科 3 回生)

私は誰かのために行動することを学んだ。アイデアを出しあいコンペティションをしたり、イベントに参加したり、先輩・同回生と仲良くなったり、初めてのことで緊張したがどれも楽しい思い出になった。どの体験も豊郷の地域、人が、どうしたら喜んでもらえるかを考えて行ったことなので、誰かのために行動することは楽しいと学ぶことができた。

中野美香 (環境建築デザイン学科 1 回生)

地域からのコメント

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 理事長 北川稔彦さん

とよさと快蔵プロジェクトは、地域の空き家を改修し、ゲストハウスの整備を手がけてくれました。今、町の民泊推進の方針もあるので、ゲストハウスへの取り組みは、おもしろく感じました。また週に一度ではありますが、バーの運営での地域の方々との交流の場づくりや、夏まつりや地蔵盆などの地域イベントへの協力で、地域の方々と関わる機会を持つことで、地域活動のスムーズな取り組みができていたと思いました。

NPO 法人とよさとまちづくり委員会 副理事長 岡村博之さん

毎年の活動とは言え、メンバーの入れ替わりがある中、勢いが止まることなく皆さんの活動を継続して頂いていることに感謝致します。皆さんの活動は、まちづくりだけではなく町として無くてはならない存在になっています。本年度も整備、イベント運営、町の会議、祭の参加など精力的に活動して頂きました。県立大学の関係者の皆様、日頃から学生達の活動支援を頂いているからこそ、伸び伸びと地域活動に邁進しておりますこと合わせて御礼申し上げます。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

長年に渡る活動の中で安定した活動が継続できています。先輩たちが様々な苦労の中から積み上げてきた情報共有の仕方や企画運営のコツなど、自分たちのやり方に活かしながら、できるだけメンバー全員に活動への参加意識や町の人たちとの交流の機会を設けることなど、大切にして益々躍進することを期待します。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



どろんこまつりフライヤー

05 信・楽・人 -shigaraki field gallery project-



信楽の隠れた良さを再発見！

焼物のまち信楽で活動する窯元さんや商店街のみなさん、信楽を盛り上げようとしている方々と共に地域の隠れた魅力を再発見し、様々な形で発信しています。陶器の製作や、パンフレット・マップ作成など、ここでしかできないことを学生自らが提案しています。

TEAM DATA

チーム名：信・楽・人 -shigaraki field gallery project-

代表者：中島優（環境科学部）

メンバー数：9名

指導教員：印南比呂志（人間文化学部）

活動場所：信楽窯元散策路、甲賀市信楽町

関係団体：信楽窯元散策路のWA

近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) ぶらり窯元めぐり インフォメーション



消しゴムハンコ作り (04/04)

(2) 湖風祭での食器製作・販売

★見出し写真：湖風祭の商品作成 (05/21)

(3) shiroiro-ie のメンテナンス



shiroiro-ie のメンテナンス (09/23)

(4) 英語版マップ製作

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度の活動で、昨年度の反省が活かされたのが夏湖風祭での陶器の食器販売である。昨年度はフリーマーケットとして出品したが、周りの店舗の価格設定が安く、売り上げが伸びなかった。製作した商品もテーマや統一感がなく雑多であった。それらを踏まえて今年は環濠沿いのテントで販売した。昨年度ほど安さが重視される場ではないため商品そのものの良さを感じ取ってもらい、一般参加者にも学生にも購入してもらうことができ、人々が信楽焼に触れるきっかけを作ることができた。製作物についても、全体的にシンプルで広い層の人に手に取ってもらえるものになった。ぐい呑は学生からの要望があった商品ということもあり好評であった。来年度以降も、常にターゲットを意識した製作を続けたい。

ぶらり窯元めぐりや「shiroiro-ie」のメンテナンスなど、信楽での活動ではたくさんの窯元さんや地域の方々に関わりながら活動することができた。窯元散策路のWAは窯元さんだけでなく、訪れた一般の方にも好評であった。窯元のこと、信楽焼のことを知ってもらうきっかけを一つ作れたのではないかと考える。

英語版のマップ製作も少しずつではあるが順調に進行している。海外から訪れた方がより信楽について理解を深める手助けになるものを目指し、製作を続けていく。

活動を通して学んだこと

今年も様々な活動を通して職人さんだけでなく信楽を訪れるお客さんとお話できたり、普段信楽に触れる機会があまりない学生に興味を持ってもらえたりと、充実した活動内容になった。昨年の反省をふまえて実際の製作・販売を行い、信楽や信楽焼についてさらに理解を深めることができた。

岡田京子（生活デザイン学科 2 回生）

地元の方々と関わり合いながらイベントなどを進めることで、信楽について多くのことを学ぶことができた。しかし、信楽焼の特徴や他の焼き物との違いなど理解が曖昧なところがあり、説明がきちんとしていけないときがあった。もっときちんと自分たちが活動していることについて細かい知識を身につける必要があると感じた。

横沙也加（生活デザイン学科 2 回生）

私は予定通り活動することの大切さに加え、思っている以上にそれが難しいことが分かった。限られた時間で何をすべきかを全員が理解し、shiroiro-ieの整備等で時間配分を考えながら臨機応変に活動できた。一方、予定が合わなかったり連絡が遅く後の活動に影響が出たりして活動が滞った時もあったので改善したい。

坂口亜弥（生活デザイン学科 2 回生）

地域からのコメント（抜粋）

窯元散策路の wa 代表 奥田泰央さん

春の「ぶらり窯元めぐり」は観光客さんだけでなく地元の方も、信楽の窯元を周って楽しんで頂きたい町歩きイベントなのですが、窯元のみでは手が回らない大切なインフォメーションを担当していただき大変助かりました。その際、独自企画で消しゴムハンコをされていたり、夏には信楽人さんで製作した陶器の販売などをしたりと、自主的、意欲的な活動を今年もされているとっておりました。

また、弊社が営業しておりますギャラリーのメンテナンスもお手伝いくださいただけでなく、現在進行中の話では今年度に一新した散策路のwaの英語版のマップ!も楽しみに待っております。

指導教員より（抜粋） 人間文化学部 印南比呂志

春に毎年開催されている「ぶらり窯元めぐり」において、イベントの総合インフォメーションを担当した。その際、来場者への広報や、オリジナルノベルティなどの販売も行った。5月から6月にかけては、大学の夏学園祭に向けた食器類の商品を地元の窯元さんに協力していただいて製作した。製作期間中は、毎週信楽を訪れて地元に着した関わりを持つことができた。秋は、これまで先輩たちが手がけてきたリノベーション施設のメンテナンス活動なども行った。活動の継承という点で、このような取り組みは、先輩たちの活動を知り、モノとして、記憶として残していくことの大切さを知ることができる。また、芸術祭の期間中や様々な街のイベントで情報発信のための使用されている散策パンフレットの英訳作業を行った。この活動は、様々な研究領域を専門とする学生たちの力が発揮されたサポート活動であろう。

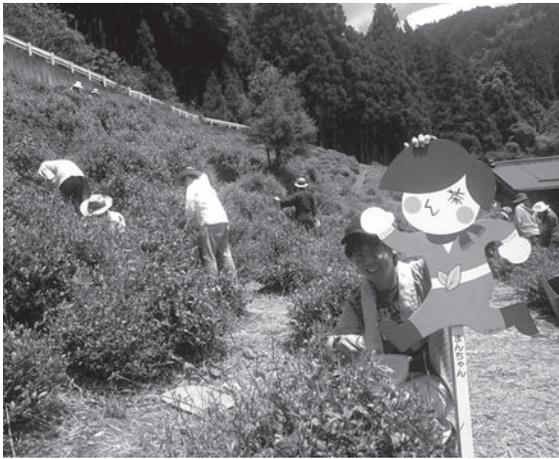
DELIVERABLE

成果物 / 制作物



陶器の食器具類（湖風祭・ミツマルシェで販売）

06 政所茶レン茶^ー



チャレンジ100%! ChangeはChance!

滋賀県東近江市政所町にて、お茶づくりを通して政所の魅力を伝えていきたいと思い活動しています。本学の授業をきっかけに結成されました。茶畑をお借りし、お茶づくりから販売までを行い、地域の魅力を発信しています。

TEAM DATA

チーム名：政所茶レン茶^ー
代表者：大賀雄介（環境科学部）
メンバー数：17名
指導教員：上田洋平（地域共生センター）
活動場所：東近江市政所町
関係団体：茶縁の会

近江楽座活動年度： 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) お茶づくり
★見出し写真：茶摘み (05/21)

- (2) イベント



たこたこ交流会 (12/23)

- (3) 広報活動



ちゃばら出店 (07/09)

- (4) ほうじ茶づくり
(5) アイデアコンテスト参加
(6) LINK topos 参加
(7) まちづくりカレッジ in 伊勢

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

お茶づくりと販売においては昨年度よりも、計画や結果においてうまくいった。活動あたりの人数が多くなったため、全体的に作業時間を短くすることやお客さんに話しかけることが多く出来たためだと思われる。しかし、お茶づくりは作業の方法を口頭で伝えているため受け継がれなかった工程があった可能性があり、見直しが必要である。そして販売において売り切れなかったお茶はまだ多く存在し、活用法や販売の回数を考えていく必要がある。

また今年度はさまざまなイベントに参加した。自分たちの活動を全国に広める機会や活動を振り返る、もしくは他の活動を聞き参考にするといったよい機会となった。しかし、参加しているがイベントは主に各地の学生が集まるものが多かったため、政所茶のブランド向上に適してはいない。もっとお茶に関するイベントや社会人に対するイベントなど、政所茶を評価してもらえるところに参加することも大切だと感じた。

SNSの発信はもっとやり方を考えていくことや、新しくInstagramを使うことを通して広く広報することや、さまざまなツールを活用していく必要があると感じた。学内でも食堂で試飲会するなどの広報をしてもよかった。政所町の方へ活動を伝える「茶^ーナル」は2ヶ月に一度のペースで発行できなかった。茶^ーナルを作る組織体制が整っていなかったことが大きな要因である。

ほうじ茶づくりは煎茶のほうじ茶についてはうまくいった。しかし販売までこぎつけていないため、これから販売について考えたい。これまでチャレンジしてきた経験を活かし、販売やお茶づくりをよいものにしていく。また、販売を増やし収入を増加させ5プロジェクトに向けて事業化できるようにしていきたい。

活動を通して学んだこと

政所茶を販売する中でお茶についての知識をお客さんのお話から吸収して、お客さんに親しみやすいようにどう工夫をするかを心がけました。また販売する中で自分の活動のことや政所町について積極的に話すことで行動する力がついたと思います。

寺前翼（環境政策計画学科1回生）

茶レン茶[®]での活動を通して、お茶を作るのに多くの時間と手間を費やすこと、そのお茶を買ってもらうことの大変さを学びました。現代となつては、あまり有名ではない政所茶をどう売り知ってもらうかを考え、政所町を活性化するために、これからも多くのことを学び行動していきたいです。

野々村恋（材料科学科1回生）

私が政所茶レン茶[®]の活動において学んだことは、現状を変えることの難しさです。自分が茶レン茶[®]に加入して約1年ほど経ったが、外側で目に見える変化は無いように感じます。内部では少しずつ変わっているが、大学生が起爆剤になることは一筋縄ではいかないということを学びました。

角井優斗（環境政策計画学科1回生）

地域からのコメント

政所茶農家 白木駒治さん

今年もみなさんよく頑張ってくれたと思います。また何か困ったことがあれば、いつでも聞きに来てください。私もできる限りの指導をします。ただ一つ気がかりな点は、引継ぎについてです。君たちは茶の生産者であると同時に、大学生でもあるため、茶づくりにかける時間が限られており、頻繁に代替わりが行われる。しかし、その中でもより円滑に、次の世代に活動を継承できるよう工夫してほしいです。今年から政所茶生産振興会も発足し、皆さんの活動もより幅広くなったことでしょう。来年度もさらなる活性化を目指して、良いお茶を作りましょう。

指導教員より

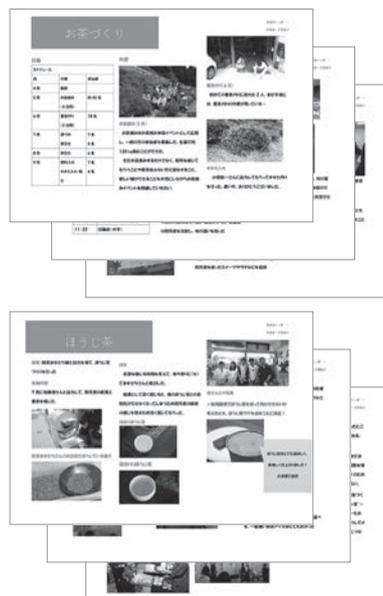
地域共生センター 上田洋平

よいチームになった。フォロワー型のリーダーをメンバーがまたよくフォローしていた。4月には、生産地政所としては史上初の生産者組織「政所茶生産振興会」が発足したが、このことについては、茶レン茶[®]（および茶縁の会）の存在とその活動がひとつのきっかけになったと思う。地域の人びとのなかに「あの子らががんばっているのだから、私たちも」という気持ちを喚起したものと思う。

地に足のついた堅実な活動が持ち味だが、ペースがととのった今、新機軸にも挑戦したらいい。なにしろ政所はアジア-ヨーロッパにわたって大陸をつらぬく「ティエロード」につながっている。それくらいの視野で。東京でのビジネス話もある。

冒険してみよう。「この子なら！」と見込んだ若者たちを「用意周到に失敗させる」くらいの芸当は、私も、地域の人びとも心得ています（微笑）。

DELIVERABLE 成果物／制作物



茶[®]ーナル

07 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト



モットーは「無理なく、楽しく！」

障がい者を有する人と学生が互いに成長することを目的に、NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの支援活動を行っています。活動を通じて、障がい児・者を支える地域づくりを推進することも目指しています。

TEAM DATA

チーム名：ボランティアサークル Harmony
代表者：福永治佳（人間文化学部）
メンバー数：23名
指導教員：中村好孝、杉浦由香里（人間文化学部）
活動場所：彦根市、東近江市、学内
関係団体：NPO法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 定例活動



油絵 (09/23)

(2) 宿泊体験

★見出し写真：夏の宿泊体験 (08/20)

(3) クリスマスコンサート



クリスマスコンサート (11/25)

(4) カヌー体験

(5) 芋ほり体験

(6) 定例会議

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度から活動後に振り返りシートを書いてもらうようにしました。感じたことや改善点などを記入してもらい、反省点を次の活動で活かすことができたと考えられます。また、情報の共有もできたと思います。

子どもが描く絵にも変化がみられました。例えば、絵を描くときに暗い色を使うことが多かった子どもが以前よりも明るい色を使うことが多くなりました。この理由は、活動時に学生が担当する子どもを固定することによって、学生と子ども間の信頼関係が強くなったからであると思います。学生が「暗い色が多いから、次はこっちの明るい色も使ってみたら」と声をかけると、アドバイスに耳を傾け、明るい色も使ってくれるようになりました。

他にも、親がいないと活動することが難しかった子どもが、親が近くにいなくても学生と一緒に活動できるようになりました。これも信頼関係を築くことが出来たからであると考えられます。今後も担当の固定を続けて行なおうと思います。しかし、固定した学生と子ども間には信頼関係が生まれにくいのではあまり意味がないと思います。複数の子どもと複数の学生との間で信頼関係を築いていくためにも今後は時期をみて、担当を変えていく必要があると考えました。

課題は積極的に参加する学生の人数が少ないため、負担が大きくなってしまいます。実際、活動するにあたって活動場所の予約等はほとんど固定されたメンバーが行っています。この負担を軽くするためにも、メンバー全員が予約等できるようにマニュアルの作成をしていきたいと思っています。マニュアルを作ることによって、負担が軽くなるとともに、次年度への引き継ぎも今までより容易になると考えられます。

活動を通して学んだこと (抜粋)

ボランティアの難しさを実感した。人手不足であったり、活動の継続であったり要因は様々だが、こうした課題は自ら考えて克服していかなければならない。手際の悪い私だが、メロディーの皆さんや先輩の力を借りて活動を続けることができた。その場その場で求められることを考える力が養われたと思う。

森 動 (地域文化学科 1 回生)

色々な立場にいる人たちとコミュニケーションをとってみたいと思い、参加するようになった。考えていることや私たちが当たり前にできることも彼らにとっては至難の業であったりすることを痛感した。人は異なる境遇や背景を持っているので、それを若いうちに経験することはとても良いことだと改めて実感した。

田中裕也 (国際コミュニケーション学科 1 回生)

勧誘のチラシを見て興味を持ったので、新入生歓迎会に行かせていただきました。その雰囲気がとても温かく居心地が良かったため、活動に参加することにしました。活動を通じて、子どもたちにどのような言葉をかけるのが良いのかということをしりずつでも理解することができたと思っています。

真野智詩 (地域文化学科 1 回生)

今まで、障がい者の方が危険なことをしないようにすることが支援だと思っていました。しかし、自由にさせてあげるのがいい人がいたり、話を聞いてあげると喜ぶ人がいたり、関わる時の距離感が人によって全然違うことが分かりました。このことは実際に経験して初めて分かったことで、感謝しています。

澤卓馬 (環境生態学科 2 回生)

地域からのコメント (抜粋)

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー 原由希子さん

初めて活動の見学に行った時、わが子と同じように障害を持った子どもさん達が、大学生のお兄さんお姉さん達と楽しそうに活動している姿を見て、衝撃を受けました。特別な専門知識も持っていない普通の大学生、"本当にそんな学生さんに子どもを任せて大丈夫なのかな..."と不安はありましたが、最初に見た他の子の楽しそうな姿が忘れられず、メロディーに入りました。

私が嬉しく思うのは、ハーモニーの学生さん達が、障害者(児)や福祉に興味を持ってくれる事です。普通に生活していたら、きっと関わる事はなかったでしょう。でもハーモニーとして活動される中で、卒業後の進路に"福祉関係の仕事"というのを考えてくれて、そちらに進んでくれる人がいる事を、本当に喜んでます。私達親は、子どもの将来を考えると暗くなります。でも、ハーモニーの学生さんに、私達は希望の光を見つけました。今はまだ小さな光かもしれませんが、でもきっと、大きな光になって、これからの未来を輝くものにしてくれると、私達は信じています。

指導教員より (抜粋) 人間文化学部 中村好孝

Harmony の活動は 15 年の歴史を持つ。その継続性は特徴の一つである。着実な活動を行ない、地道な引き継ぎを続けてきた成果である。メロディーをはじめとする地域の様々な人々や団体のお世話にもなり、また何かしらの貢献もしてきたことの結果でもあるだろう。その貢献は具体的な活動の場にとどまらない。障がい児・者についての知識やちょっとした接するスタンス、障がいや福祉について他人事ではなく考える感受性を身につけて社会に出ることは、学生本人にとっても、地域で生活する障がい児・者やその家族にとっても、究極的には地域や社会にとっても、良いことだろうと思う。これからも継続して欲しい。そのためにも、参加学生の人数が増えることが必要だ。現在はボランティアサークルに入りたいと思った学生には多くの選択肢があり、Harmony もその中から選ばれる魅力ある活動でなければならない。大変なことだと思うが、地域に根ざす活動を続けてきた Harmony にはそれだけの魅力があるはずだ。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



クリスマスコンサートパンフレット



クリスマスコンサートポスター

08 地域博物館プロジェクト



文化財を救え！ 我ら学生学芸員！

民具や古文書、お祭りなど、地域には多くの文化財があります。“地域文化財”や地域の歴史・文化などを住民の方々とともに調べ、活用し“地域博物館”をつくりあげていくことで、地域の魅力を再発見することをお手伝いします。

TEAM DATA

チーム名：スチューデント・キュレーターズ

代表者：奥田日和（人間文化学部）

メンバー数：12名

指導教員：市川秀之、東幸代、武田俊輔（人間文化学部）

活動場所：学内、彦根市、米原市、高島市、近江八幡市

関係団体：白谷荘歴史民俗博物館

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 白谷荘歴史民俗博物館調査事業



白谷荘歴史民俗博物館での調査 (08/05)

(2) 奥伊吹民具調査事業

★見出し写真：奥伊吹曲谷民具調査 (09/25)

(3) 博物館夏祭りへの参加



博物館夏祭り (07/17)

(4) 湖風祭展示、イベント事業

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

活動始動から5年経ち、本年度も先輩方から引き継がれた事業を安定して行うことができた。白谷荘歴史民俗博物館調査事業では、月1回の定例調査をおこなうことによって、地道な作業ではあるが、確実に調査データの蓄積ができていく。また、2回生の積極的な参加により、整理作業や調書取りのペースは大幅に上がっている。しかし、展示替えや民具展示エリアのこまめな清掃作業ができなかったことが反省点である。来年度は調査だけでなく、館内展示にもしっかり目を配っていききたい。

奥伊吹調査事業では、曲谷での調査に着手することができたが、まだ調書作成まで到達していないのが課題である。来年度はその調書を作っていくとともに、同じく奥伊吹にある吉槻での民具調査もおこなっていききたい。最終的には東草野小中学校での展示を目指している。完成は3～4年後となるが、現段階からその展示プランを考え、継続した活動を受け継いでいくことで1つの地域博物館を作りあげていくことが重要である。

上記のようなインプットだけではなく、活動を外部の人に知ってもらうためのアウトプット活動も博物館夏祭りや湖風祭でおこなってきた。来年度は博物館夏祭りの主催を担当することになった。そのため、活動内で博物館夏祭りに費やす時間も1人ひとりの負担も増えていくことになると思うが、みんなで協力し、この大イベントを成功させたいと思う。

地域博物館を作り、最終的には地域のみで運営を続けられるように展示や体制を整えていくこと、そしてその情報発信をすることが私たちの役割である。地域における私たちの在り方、活動の引き際というのも考えながら、活動を継続させていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

地域文化学科生であっても1回生のうちは授業で実物の古文書を扱うことはほとんどなく、調査に参加する機会もほとんどありません。そのため、古文書や民具の調査に定期的に参加できたことは、自分にとって大変ためになる経験でした。調査の際に、昔の人々の生活の様子が垣間見え、とても楽しかったです。

野口美希 (地域文化学科1回生)

楽座での活動を通して資料を保存して残すことの重要性を日々感じます。調査資料はその地域のかつての姿を物語っているものもあり、毎回の活動で発見があります。そのような活動に携わっていることがとても価値のある経験で、これからも取り組んでいきたいです。

原知里 (地域文化学科2回生)

昨年に続いてこの楽座で活動をして、今年も貴重な体験をすることができたと改めて感じました。2回生になって自分たちが主体となり企画を考える機会も増え、調査対象となる資料だけでなく、地域の方や他の団体の方との関わりも深くなり、様々な経験を積んでいきたいと感じました。

井上日香理 (地域文化学科2回生)

今年もこの楽座で様々な活動が出来ました。古文書や民具の調査はもちろんのこと、展示の企画を考えることや、その前段階の会議に参加できるというのは、この楽座に参加しているからこそ、できたのだと思います。これからも、様々な経験を積んでいきたいです。

山田七帆 (地域文化学科2回生)

地域からのコメント

白谷荘歴史民俗博物館 川島光男さん

白谷荘歴史民俗博物館の調査・整理・維持・保存のために先生方と共に日曜日の早朝より貴重な時間をさいて携わって頂き感謝しています。当館の地域では過疎化が進み住民の皆様も高齢化し若い人は少なくなっています。伝統的な行事は次第になくなっていくなど地域の伝統・文化も薄れてきてさみしくなってきました。市町村合併がされ地域文化担当の方も少なくなり組織的にも地方文化への関心が以前より薄らいできているように感じられます。そのような中で皆様が直接地域の民具や教科書・古文書に触れ地方文化を感じとっていただけたら幸せに思っています。若い皆様が当館を通じて地方の民俗文化を守ってくださっているように思います。私も学生の皆様方・先生方・一般ボランティアの皆様と共に地域文化を守っていきたくと考えています。又、皆様方の成果をいろんな所で発信していきます。

指導教員より

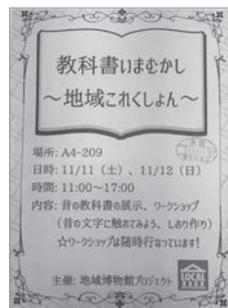
人間文化学部 市川秀之

例年同様に一年を通じて安定した活動をする事ができたと評価している。白谷荘歴史民俗博物館では着実に調査を実施し、長年続けてきた古文書、教科書の整理も終盤を迎えている。今後は展示を中心に活動の方向転換が必要である。また奥伊吹においても数年来続けている民具調査が3年目を迎え、今後は東草野小学校における展示活動を視野に入れた活動をおこなう必要がある。

例年、調査や整理の活動が中心であったが、今年度は滋賀県下の博物館夏祭りにも参加し、南彦根のビバにおけるイベントでは2千人を超える参加者があり、活動をアウトプットするとともに、滋賀県下の博物館活動全体にも貢献することができたのは大きな成果であった。来年度は博物館夏祭りの事務局を地域博物館プロジェクトで引き受けることが決まっており、社会的にはこのプロジェクトの活動は広く認知されつつある。より積極的な取り組みを期待したい。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



湖風祭チラシ

09 座・沖島



沖島でまなぶ、まじわる、ささえる

日本で唯一、湖に人が暮らす島、沖島。島民は漁業を生業に琵琶湖と共に暮らしてきましたが、過疎化などにより、暮らしの継承が危ぶまれます。この状況に「学生も何かできるのでは?」と、「学ぶ・まじわる・支える」の3つを目標に島の振興のため活動しています。

TEAM DATA

チーム名：座・沖島
代表者：久保瑞季（人間文化学部）
メンバー数：26名
指導教員：上田洋平（地域共生センター）
活動場所：近江八幡市沖島町、学内
関係団体：沖島町離島振興推進協議会、沖島町自治会
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 島内の祭りのお手伝い



桜祭り (04/09)



春の大祭 (05/03)

- (2) 沖島小学校行事、地域の方のお手伝い
★見出し写真：沖島小学校遠泳大会 (07/22)
- (3) 沖島マップ作成
- (4) 沖島ベンチ作り
（「とよさと改蔵プロジェクト」とのコラボ）
- (5) 湖風祭出店
- (6) FM滋賀主催イベントのお手伝い

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

発足してから2年目であり、今年度はチームとしての体制づくりを主に行った。月に一回定例会を開くようにしたこと、広報や会計といった役割をつくったことがその例である。定例会を開くことはメンバーで情報を共有し、話し合いの場を設ける機会となり、チームとしての団結と多様なアイデアを出し合えるようになった。会計の仕事は多いため、役割を分担したことは仕事の分散に繋がった。しかし、広報活動は定期的に行えておらず、改めて見直す必要がある。また、活動2年目ということもあり、沖島の方々に認知されるメンバーが増えた。さらに、もっと深く島の運営に関わって欲しいという声が増えるなど、信頼関係を築くことが出来たと考えられる。来年度はもっと期待の声に応えられるようにしていきたい。

今年度は「とよさと改蔵」とのコラボにより、観光客向けのベンチを作ることが出来た。座・沖島だけでは、成し得ないことや思いつかないことを他のプロジェクトと共同することで可能になることが分かった。これからもこのようなコラボ企画を考察していきたい。

本プロジェクトは島民との関わり無くしては成り立たない。メンバーがより沖島に溶け込み、島民と共に沖島の存続のために最善の道を模索出来るようなチームを作っていきたい。

活動を通して学んだこと

この1年間の活動を通して島民の方とお話をする機会が多く、地域おこし・地域づくりとはそこに住む地域の人がどのように自身の住む地域に対し考えているのかを踏まえなければならず、踏まえていない活動は受け入れられないうえに無意味なものになってしまうということを学んだ。

柿佑爾（地域文化学科2回生）

島を盛り上げるにあたって、自分たちでイベントを企画し実行するだけでなく、島で行われる祭りや小さな行事を手伝うこともまた、力になれる方法なのだと感じた。私たちの代が終わった後もずっと沖島の人たちと共に島を盛り上げていけるサークルにしたいと思った。

斉藤文字（生物資源管理学科1回生）

月一回の定例会や実際に島に行って地元の方と祭りの運営などに携わることによってどうしたらもっと沖島を色んな人に知ってもらえるか、もっと活性化させられるかを考えることが出来た。考えて行動することの難しさを実感した一年だが、この一年を次の一年の糧にしたい。

佐野茜（人間関係学科1回生）

地域からのコメント

コミュニティセンター職員 小川文字さん

座・沖島さんには春祭り、夏祭りを始め、運動会、イルミネーションなどで沖島の振興に多大なご協力をいただいています。若者が島内で活動してくださるだけで活気が生まれるのですが、そればかりでなく、とても気持ち良く対応してくれます。特にイルミネーションでは急な依頼にもかかわらず、さすがが大学生、の出来栄で島民みんな喜びました。他にも沖島食堂で高齢者とも関わってくださって、今や沖島になくてはならない存在です。

指導教員より

地域共生センター 上田洋平

この2年間は座・沖島の「第1世紀」であった。またこの間は奇しくも、沖島の人びとにとっても、ヨソモノとのつきあいにおけるひとつの画期であったと思う。座・沖島の「創業者」は、ついには自身が沖島に住み込むという挙に出たが、そういう人物を、島自身が呼び寄せたのだろうか。学生の一小チームといえども、時代のかかわり抜きには成立しない。一方で、チームとしても、地道に活動を積み重ねながら、よく人びとの信頼を勝ち得てきたと思う。破天荒な創業者からの引き継ぎはどうなることかと思っていたが、無事に相応しい人たちを得て、第2世紀が始まりそうだ。

島の人は、これまでの800年とこれからの800年、前後千数百年の時間を自分に関わりある時間としてこの画期を生きている。こんな時こそ、島のあゆみと営みに寄り添って、しかもむしろ、小さな約束をこそ大切に履行しながら、じっくり向き合ってみたらいい。

他の地域、特に離島で活動する学生との他流試合とネットワークづくり、そして島出身の若い世代、すなわち他出子の人たちとの交流ができれば、面白いことになると思う。

DELIVERABLE

成果物／制作物



とよさと快蔵プロジェクトコラボベンチ



沖島マップ

10 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-



地域よし、学生よし、古民家よし

築140年の古民家で、改修作業、イベント企画、ひょうたんの栽培・加工販売など様々な活動を行っています。地域の方とはもちろん、学部学科を超えた学生のつながり、留学生との交流といった古民家を拠点にあらゆるつながりが生まれることを目指しています。

TEAM DATA

チーム名：かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
 代表者：薙井円香（環境科学部）
 メンバー数：28名
 指導教員：林幸司（環境科学部）
 活動場所：彦根市上岡部町
 関係団体：上岡部町自治会
 近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) イベント開催事業

(2) 古民家改修事業

★見出し写真：パーゴラベンチお披露目会
さつまいもほり (11/25)

(3) ひょうたん事業

(4) 地域行事への参加



太鼓登山 (04/16)

(5) ひょうたんの出店



三方よしエコフェア (12/09)

(6) かみおかべひょうたん冊子づくり

(7) 畑づくり

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

組織の運営形態について、昨年度までの班制度から全員ですべての事業の実施計画を考える形にした。これによりメンバー全員と顔を合わせることが増え、いろんな意見が出るようになった。加えて、それぞれの事業の情報共有が容易にできた。また、パーゴラベンチ制作では木興プロジェクトさんと、古民家ホームパーティーでは日本酒プロジェクトさんとコラボすることができた。他団体とコラボすることで、交流の場が広がるだけでなく、本団体の知識・技術ではやり遂げることのできない活動を行うことができた。また新たに古民家ホームパーティーを行った。地域の大人の男性の方と交流することができ、上岡部町についてのお話や人生談を聞くことができた。このイベントは好評であったため今後も続けていきたい。

今年度は交通手段で愛のりタクシーを利用することが多かった。その際に、タクシーの運転手さんから、声を掛けられ、この活動は地域の方に知ってもらえていることが分かった。

反省点は主に3つある。1つ目は、ひょうたんの栽培、地域行事へ参加するメンバーが限られていることである。ひょうたん事業では、天候や発育状況によって活動日が左右されるが、できるだけ早く決まっていることは連絡するように心がけたい。地域行事に関しては、上岡部町の現状をメンバーに説明し、地域行事に参加することの意義を理解してもらう必要がある。2つ目は、1月に計画していた節分パーティーが大雪で中止になったことである。対応が遅れたため、どのようなときに中止にするのかを事前に考え、イベントのチラシに記載しておく必要があると思った。3つ目は、代替わりをするときに引き継ぎがきちんとしてきていなかった。反省点・気づいたことはその都度記録し、データとして残しておくべきだと思った。

来年度は、ひょうたん事業・地域行事に参加するメンバーを増やすことはもちろん、新たなイベントづくり、他団体他大学と協力した活動を行っていききたい。また、除草剤の影響で2年近く行っていなかった「郷土野菜の栽培」も再開していききたい。

活動を通して学んだこと

昨年度までは主にイベント事業と改修事業にしか参加していなかったが、今年度はひょうたん事業にも参加できた。会計をやらせてもらって近江楽座の仕組みを知ることができ、いい経験になった。中間報告会にも参加して、他の近江楽座がどのような活動をしているのか知ることができてよかった。

中江祥子（生活栄養学科2回生）

イベントに興味を持ち、この団体に入りました。しかし、入ってみるとイベントのための準備や計画も楽しく、学ぶことも多くありました。地域の人から教わった郷土料理をイベントの時に出せたのがよかったと思います。活動を通じて地域の人々ともっと交流していきたいです。

鍵本里奈（地域文化学科1回生）

かみおかべ古民家活用計画を通じて、実際に地域の方とかわるごとの大切さを学んだ。イベントを古民家で行うことによってその地域について知ることができたり、地域の人と交流することができたり、授業で地域活性化について考えるだけでは得られることのできないことが多くあると感じた。

松尾朋（人間関係学科2回生）

地域からのコメント（抜粋）

上岡部町自治会長 大西茂登和さん

私たちの上岡部町も、他の集落と同様に家の持主が上岡部町を離れ、空家となる建物が多く、また少子高齢化の波も押し寄せ高齢化率が30%を超える中、かみおかべ古民家活用計画のメンバーが活動してくれています。

ピザパーティーでは主に小学生の親子が参加しました。メンバーとの楽しい食事や交流の時間を過ごしたそうです。ホームパーティーではあまり接触の無かった世代の人たちとの交流があり、参加した人達から若い人たちと話ができて大変良かったと聞いております。この他にも祭りや、グランドゴルフへの参加、瓢箪作り等精力的に活動をしてもらっています。若い人たちの節度を持った行動と、積極的に上岡部町にかかわろうとする姿勢は、今の若者も頑張っているな、との印象を強くする次第です。今後も精力的な活動をされることを期待しております。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 林宰司

今年度は、班制度を廃止したという組織改革を行ったことが一番大きな変化のようです。元々、班制度は、各事業について担当者に責任を持たせることが目的でした。各メンバーが自身の所属する事業に責任を持ったうえで、他の事業にも協力するという体制でした。年度ごとにメンバーが入れ替わり、先輩からの引継ぎが十分になされていないようなので、以前の状況をよく把握し、何がどのように変わったことで結果がどう変わったかについてよく考察を重ねて下さい。建築物の改修事業において人手が集まらないことについては、事業計画とスケジュールリングを早くから行って、学外および地域以外の人にも呼び掛けるよう、後輩たちに引継ぎを十分に行き、改善を行って下さい。伝統野菜の栽培についても、伝統野菜の保存会の方々とのつながりもなくなってしまっていますので、過去の資料をよく確認して、メンバーが変わった後も事業の一貫性を持たせるような工夫をして下さい。

DELIVERABLE

成果物／制作物



バーゴラベンチ
木興プロジェクトと共同で作成



ひょうたん加工品



かみおかべひょうたん手帖

<その他成果物>

古民家の壁にコンセントを設置

11 たのららまちづくりプロジェクト



田の浦の元気をもっと知ってもらいたい！

東日本大震災で被災した宮城県南三陸町田の浦地区で、コミュニティ再生のボランティア活動を行っています。現地での交流イベントの企画・運営を行うとともに、活動で得た繋がりや経験を滋賀県内に広めるために、防災啓発イベントを行っています。

TEAM DATA

チーム名：田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代表者：菊池瞳（人間文化学部）
メンバー数：25名
指導教員：鶴飼修（地域共生センター）
活動場所：彦根市、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 海の大運動会

★見出し写真：海の大運動会 (08/06)

(2) 3.11 キャンドルナイト



3.11 キャンドルナイト (03/11)

(3) おちゃっこクリスマス会



おちゃっこクリスマス会 (12/23)

(4) 湖風祭出店

(5) おちゃっこ会

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

震災から6年という月日が経ったが、被災地も変わっていく部分と変わらない思いを抱えている。震災の記憶は忘れることはないし、亡くなった方々は戻ることはない。そんな中で、少しずつ再形成されていく田の浦コミュニティだが、私達の活動も微力ではあるが田の浦の復興に寄与できていると感じる。まず1つは、現地との協力で成り立っているイベントに関して、物品、スタッフ、計画など、ほとんどの部分において、現地の方々の主体的な実施が見られるようになってきた。毎月のおちゃっこ会が学生の来ない時でも開催したりと、大きな前進だと感じる。

2つ目は、学生が現地を訪れることの重要性である。私たちは、もともと「行かせていただいている」のだが、現地の方々が、「いつもありがとう」「また来てね」と言ってくると、微力ではあるがなにか力を分けられているのかなと感じる。遠い、時間のかかる活動ではあるが、この繋がりには決して無くしてはいけないと考える。

3つ目は、湖風祭にて、田の浦のタコをPRできたことは大きな意味があったと思う。実際、田の浦という地域は漁業が生業であるということもあり、滋賀と田の浦が食材を通じて協力し合えたことが大きな成果だった。

一方で、課題もたくさんあった年だった。まず、今年度は新入メンバーがおらず、メンバーの数が少ない状況での厳しい活動であった。来年度は、メンバー集めと広報活動に力を入れ、震災の記憶とそれがもたらしたものをより多くの人に伝えていけるようにする必要がある。また、週一回のミーティングだけでは、連絡などが行き届かない場面が少しあった。ミーティングの頻度を考え直し、メッセージなどで密に連絡し合うことの重要性を感じた。

活動を通して学んだこと (抜粋)

今年はメンバーの勧誘が上手くいかず厳しい1年でした。現地は新しいことがたくさん起こりましたが完全な復興にはまだまだ遠いように思いました。しかし周りの意識は無くなっていくばかりなのでもっと現状を伝える活動をしないとイケないと思いました。

杉村麗 (材料科学科2回生)

私は広報についての学びを得ました。活動紹介や催し物の集客の為に、どのような宣伝が効果的か、試行錯誤したことが勉強になりました。中日新聞さんに取材して頂いた時には、どのように紹介すれば紙面で初見の方に防災や震災復興に興味を持って貰えるか、と自分達の活動を客観的に見てみることを学びました。

長野景麗 (地域文化学科3回生)

田の浦という土地へ実際に行くと、滋賀にいただけではわからないことばかりです。イベントが終わったとき、地域の方々が「また来てね」と言って嬉しそうに帰って行かれるのを見ると、この活動の意義がそこにあると感ずることが出来ます。4年間通わせていただけたのは、様々な方々の協力あってのことだと感じます。

菊池瞳 (国際コミュニケーション学科4回生)

地域からのコメント

田の浦契約会会長・NPO法人田の浦ファンクラブ会長 三浦富一さん

学生みんなに明るく声をかけてもらって良かったです。地域の人に学生が溶け込んでもらって、気兼ねなく対応してもらえて、楽しい時間です。震災後からせっかくできたつながりなので、学年が変わり、メンバーが入れ替わっていくけれど、ずっと来てくれたら嬉しいです。いつも来てくれてありがたいです。これからも、今までと同じように、関わっていただけたいです。これからもよろしくお願いします。

指導教員より

地域共生センター 鵜飼修

2011年6月から始まった田の浦における復興支援活動も7年目をむかえた。今でも極力毎月訪問するようにしているが、そうした訪問が「ごく自然な活動」に思うようになってきている。「よく来たね」「いつもありがとね」「つぎいつくの」。田の浦への訪問が、家に帰ったように感じるのには私だけではないであろう。本年度は、報告にもあるように「おちゃっこ会」が、地元のお母さん達主体で定期的開催されるようになった。これは、継続的な訪問活動が、地域の主体性を育んだという大きな成果だと思う。学生の活動であるので代替わりすることはやむを得ないが、こうした温かい関係や成果を、関係した学生たちや新たに関心を示す学生たちで共有することが、活動の広がりを生み出すのではないであろうか。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



2018 田の浦広報誌



海の大運動会開催告知チラシ

<その他成果物>

海の大運動会ボランティア募集チラシ
たのうらおちゃっこクリスマス会チラシ

12 とよさらだプロジェクト



ひと刈りいこうぜ！（野菜）

豊郷町の耕作放棄地で、地域の方にアドバイスをいただきながら野菜づくりを行っています。栽培した野菜の直販所、大学生協への販売、イベント出店を行い、地産地消の促進をめざしています。

TEAM DATA

チーム名：とよさらだ
代表者：田出瑞季（環境科学部）
メンバー数：18名
指導教員：鈴木一実（環境科学部）
活動場所：犬上郡豊郷町 / 彦根市
関係団体：豊郷町役場

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) 豊郷町での野菜作り
★見出し写真：野菜作り (09/21)

- (2) 農家さんのお米作り



稲刈り (08/29)

- (3) 湖風祭参加

- (4) 地元のイベント参加



ミツマルシェへ出店 (10/15)

- (5) サツマイモ掘り(Harmony との共同企画)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年は前年度に比べて野菜の収穫量が少なかった。年によって気候や環境も変化するので毎年全体的な収穫量には多少の差ができる。今年度は積極的に活動に参加できるメンバーが少なかったのがそれが原因で圃場の管理が上手くいかなかったためだと考えられる。また、今年度は車を運転することができるメンバーが数人しかおらず、活動地までの移動時間が車の数倍になってしまったことも活動頻度低下の原因だと考えられる。来年度からはメンバーが活動に参加しやすい状況を作っていきたいと思う。

今年度は前年度参加することができなかつたとつと祭りへの参加やミツマルシェでの出店など、地域のイベントに多く参加できたと思う。ただ前年度同様、大学生協への野菜や米の出荷、大学内の学園祭での出店を行ったが、直売所で野菜を販売するという機会は少なかった。野菜の販売には地域の活性化やとよさらだのPR、野菜栽培における知識の習得など様々なメリットがあると考えられる。衛生管理や市場の把握も必要となり、容易にできない事業ではあるが、来年度は精力的に販売を行っていききたい。また毎年行っている行事は引き継いで行うことはできたが、今年度の申請時に目標にしていた朝市への参加や保育園との共同活動が活動頻度の低下などを理由に行うことができなかった。新たな事業に取り組むためにも活動には積極的に参加していきたいと思う。

活動を通して学んだこと

とよさらだの活動において、植物を育てる楽しさや収穫の喜びは勿論のこと、地域の方との交流の楽しさや大切さも学んだ。地域の方々は私たちの野菜づくりが上手くいかない時や困った時には知恵を貸してくれ、とても頼りになった。この活動を通して学んだことを次の代にも繋げていけるよう努力したい。

小林大輝（環境生態学科2回生）

活動を通じて学んだことは、普段の学校生活では触れる機会の少ない野菜を育てる、お米を育てる体験をすることにより、自分達が食べているものが料理として出されるまでにどのような事がなされてきたのかを知ることができたということである。

田邊晴人（環境生態学科2回生）

店で並べられている野菜には、多くの手間ひまがかけられているのだと実感した。また、農業は一人では出来ないとも感じた。それは労働力の面だけでなく、技術や知識の継承、周囲の理解などでもある。とよさらだは地域の人々の力なくしては成り立たないと思った。

斉藤文子（生物資源管理学科1回生）

地域からのコメント

豊郷町エコファーマー 森久仁彦さん

とよさらだは農業経験の少ない若者たちが野菜作りに取り組んでいる。わからないなりに地域の人たちとコミュニケーションをとり、土に触れ、野菜で地域と交わっている。野菜の出来不出来は関係なく、若者が興味を持って活動してくれることは大変嬉しい。将来、この経験を生かした職業に就いてほしいと思う。

指導教員より

環境科学部 鈴木一実

前年度の反省に対する取り組み、とくに週1回の会議の定例化は良かったと思います。年間を通してイベントやさまざまな作業スケジュールがあり、積極的に活動されている様子がよくわかりました。学生数18名でよく頑張っていると思います。

どんぐりけんだいまえ保育園での共同活動は残念でしたが、現時点ではここまで手がまわらないでしょう。長期的にみて何か連携が取れるか考えていってほしいと思います。

一度お米づくり体験をさせていただいている農家さんの畔の草刈りに立ち会いました。農器具が収納してある場所から少し距離があるので、やはり車を運転できるメンバーがたくさんいるといいですね。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



野菜

坊っちゃんカボチャ、トマト
ジャガイモ、小カブ、ニンジン



カブ出荷POP

<その他成果物>
新入生勧誘ポスター

13 木興プロジェクト



木匠塾×被災地支援&防災まちづくり

東日本大震災を受けて、滋賀県立大学の建築デザイン、生活デザインの学生による震災復興プロジェクト。建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという思いをきっかけに、ものづくりによる復興支援を目的としています。

TEAM DATA

チーム名：木興プロジェクト
代表者：松井愛起（環境科学部）
メンバー数：22名
指導教員：J.R.ヒメネス、ベルデホ（環境科学部）
活動場所：宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体：NPO 法人田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) かみおかべ休憩所制作



かみおかべ休憩所制作 (08/14)

(2) サマースクール

★見出し写真：サマースクール (09/21)

(3) 定期訪問



12月定期訪問 (12/24)

(4) 海の運動会参加

(5) 湖風祭出店

(6) スプリングスクール

(7) 3.11 キャンドルナイト参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は例年と異なり院生がおらず、技術力、知識など色々なことで劣っていたが、できないことは現地の人や先生などに協力してもらった。

田の浦では嵩上げ工事が完了し、高台には新たな街区が形成され、その街区に新たに「田の浦地区集会所」が出来ている。我々の作った田の浦センターよりも広く、空調などの設備が付いていて、きれいな建物である。しかし、この集会所は鍵の管理も厳しく、靴を脱いで入らなくてはならず、3か月間使っていなかったりする。田の浦センターの方が使いやすく、気軽に行きやすいそうだ。実際、毎月のお茶っこ会はセンターで行われており、この交流センターが田の浦の拠点になっているようにも感じられる。

今年は、田の浦交流センターでの作業だけでなく、センターから離れた神社の2カ所での活動だった。それにもかかわらず、毎日の作業を見に来てくださる方も多かった。

木興プロジェクトとして7年継続して田の浦という地域に関わり続け、通っているうちに田の浦は被災地という感覚ではなくなっている。その中で田の浦に大工として就職したメンバーもいた。また、木興プロジェクトを引退しても連絡を取り合ったり、実際に行ったりするなど、個人的にも関わり、東北の現在を遠く離れた滋賀だけでなく、仕事をしている地域や地元など多くの地域に伝えている。

今後はより多くの人にこの活動を知ってもらうことが必要であり、木興プロジェクトが震災以降行った活動内容をまとめるべきだ。そのため、今後の復興支援団体に向けアーカイブ作りを始めた。その中で、少しずつ復興支援から町おこしに変わってきていることを実感している。それを踏まえて今後の活動を考えなければいけない。

活動を通して学んだこと (抜粋)

代表という立場で、運転手であり、知識、技術力のある者であったため、あれもこれもしないといけない状況だった。そんな中でどうすべきか判断を要求され困ることが多々あった。田の浦に行き、集落の人と話し、知恵や手助けしてもらいながら完成させることができた。ここで学んだことは、きっと将来役に立つと思う。

松井愛起 (環境建築デザイン学科 2 回生)

初めての土地で、初対面の人と一緒に作業するということが今までの中で新鮮な経験となった。最初はなじめないことも、地元の人とのコミュニケーションを重ねて行くことで、他では味わえない体験ができてよい思い出となった。

西村崇平 (環境建築デザイン学科 2 回生)

今まで先輩に頼りきっていたが、今年から自分たちが一番上の代に変わったことでより責任感があり大変だった。改めて先輩のすこさを感じたし、難しかったがよい経験ができたと思う。

小畑碧 (環境建築デザイン学科 2 回生)

立場の変化によって、学ぶことが多かった。教えられる側から教える側になったことで自分のことだけでなく周りのこと考えなければならぬというプレッシャーがあった。しかし、この活動を通して、視野を広くして物事を考えなければいけないことがわかった。

今堀駿吾 (環境建築デザイン学科 2 回生)

地域からのコメント (抜粋)

田の浦住民、区長 千葉昇一郎さん

立派な鳥居を作ってくれてありがとう。毎年、木興の学生が来てくれることが嬉しいし、来年もまた来てほしい。今回の鳥居以外にも田の浦には鳥居がある。その鳥居の色を塗り直してほしい。

田の浦住民、おちゃっこ会主催者 金野安美さん

あの日から7年になります。その当時は生かされたという思いだけで、何も考えられず、どうしていいのかもわからず、ただ走り抜けてきたような気がします。滋賀の皆様、学生さんたちには応援はじめ、励ましの言葉、勇気づけられ、感謝の言葉しかありません。

指導教員より 環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

田の浦と滋賀県立大学が関係を持ち始めて、2017 年度で7年が経過した。その間に木興プロジェクトがデザイン、施工、改修したニュー田の浦センターは、お互いを繋ぐ基盤となり、田の浦の集落と学生の関係はより強くなってきている。これからも、田の浦との関係を強化、改善して行ってほしい。7年間の共通体験を踏まえ、田の浦と滋賀県立大学は、今後も固い絆で結ばれるだろう。

DELIVERABLE 成果物 / 制作物



鳥居



田の浦交流センター
キッチン設備



かみおかべ休憩所
かみおかべ古民家活用計画と共同で制作

14 人と環境を救う雨水タンク



目指せリサイクル社会

プラスチックの成形技術を用いて、廃プラのリサイクルをテーマに活動しています。リサイクルプラランターに続き、雨水タンクの開発を行っています。企業や就労支援施設と連携した hana-wa 活動や清掃活動にも参加し、地域との繋がりを大事にしています。

TEAM DATA

チーム名：廃棄物バスターズ
代表者：佐藤嘉計(工学研究科)
メンバー数：15名
指導教員：徳満勝久(工学部)
活動場所：学内、彦根市、草津市、他
関係団体：社会福祉法人いしづみ会、他
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) 雨水タンク試作に向けた活動
- (2) hana-wa 活動
★見出し写真：ペットボトルキャップ回収 (04/21)
- (3) 荒神山清掃



荒神山整備 (04/20)

- (4) HIKONE キレイ隊



荒神山春祭り (05/04)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

メインのプロジェクトである雨水タンクについては、企業との連携、エコマークといった付加価値のために方針を転換したこともあり、大きく前進することができませんでした。その中で、原料の見直し、試作のための物性評価を行うことができました。来年度は、雨水タンクの実物大の試作のために、原料の粉末化といった加工を行い、実物大のタンクの試作を行っていきます。

hana-wa 活動については、これまでのつながりを維持していただける関係を作ることができました。今後も活動をより知っていただけるように、フィールドを広げていきたいと考えています。今年度も活動の参加回数が少なかったことが反省点であるため、雨水タンクのPRのためにも参加回数を来年度は増やしていきたいと思っています。

そのほかの活動である荒神山の整備や彦根市内の清掃活動への参加は、今後も継続していきます。このような以前よりお世話になっている地域の方にも雨水タンクのことを知っていただき、地域の近いところから雨水タンクを広めていけるような活動をしていきたいと思っています。

活動を通して学んだこと (抜粋)

今年度は、企業との交渉の不調から始まり、実際に企業と交渉する難しさを学びました。その一方で、様々な情報を提供していただき、企業の方の対応の方法を知ることができました。また、多くのボランティア活動をおこなうことで、研究室にこもって学べない、地域の方とのつながりといったことを学びました。

佐藤嘉計 (工学研究科材料科学専攻1回生)

計画通りには進めることの難しさ、企業の方との交渉に苦戦した一年であったと思います。その苦労した中でも、私たち学生に親身になって情報提供いただいたり、他企業の紹介をしていただいたりと積極的に外部とコンタクトするという貴重な体験ができました。

住野翔郷 (工学研究科材料科学専攻1回生)

ボランティア活動を行うことで、地域の方々とのつながりを通じて多くのことを学びました。ゴミ拾いで、通行する地域の人々に「ありがとう」などの感謝の言葉をいただくとともに、地域の方との輪を広げることができたと感じました。

金谷敦史 (材料科学科4回生)

地域からのコメント (抜粋)

HIKONE キレイキャンペーン隊 事務局長 馬場和子さん

地域への貢献活動を様々な場面で展開されている滋賀県立大学の学生さん、自ら考え、自らの思いを形にされている姿は素晴らしいと思っています。地味で目立たないかも知れませんが小さなことでもコツコツ続けることに意味があるのだと思っています。

彦根にお越しくださる方を気持ちよくおもてなしするためのキレイキャンペーン活動。ごみの減量や分別を啓発する活動・イベント会場でのキレイブースの運営等でのご協力に感謝いたします。活動することで味わえる一滴のスペアミント気分。これからも一緒に味わいたいものです。

指導教員より (抜粋)

工学部 徳満勝久

今年度の地域貢献活動として、hana-wa 活動の継続的实施(年間約5百万円規模の事業収益となる活動のサポート)、地元ボランティア団体と共同で彦根市内の美化活動(毎月2回)、「ゆるキャラ祭り」や「荒神山春祭り」でのゴミステーションやゴミ拾い活動、荒神山の整備活動、福祉施設でのペットボトル回収等、“地域での地道な活動”を継続して実施すると同時に、「地域分散型治水ダム」と銘打った取り組みについて、やっとその製造実験ができるまでに漕ぎ着けたのが今年の成果であろう。

「廃棄物バスターズ」は今まで数々の学生・ビジネスコンテスト、環境コンテスト等で多くの賞を受賞し、“目立つ活動”ばかりが目を見てきた感もあるが、実際には“目立たない活動・地道な研究”を黙々と行う世代の努力があつての成果であった。そう言う意味では、本年度は次年度に繋がる“目立たないが次の芽を育てる”活動の年次に相当するものであり、来年度にそれを実際の“芽”に育ててくれるものと期待している。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



雨水タンク作製 (引張試験)



雨水タンク作製 (衝撃試験)

<その他成果物>

雨水タンク試験 (試料調製)

15 木之本こじへいプロジェクト



木之本に新たな玄関口を！

滋賀県長浜市木之本の北国街道に位置する古民家を改修し、長浜北部への入り口として国内外の人々の目印となる魅力的な拠点を作るプロジェクトです。地域に根ざし、新たなヒト・モノ・コトの繋がりが生まれる場所を作ることを目標としています。

TEAM DATA

チーム名：木之本旧麴屋こじへい改修プロジェクト

代表者：土器屋葉子（環境科学部）

メンバー数：9名

指導教員：川井操（環境科学部）

活動場所：長浜市木之本町木之本

関係団体：一般社団法人滋賀人

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) 木之本・長浜 町歩きワークショップ
★見出し写真：町歩きワークショップ(10/08)



町歩きワークショップ(10/08)

- (2) 木之本街並み研究会での調査発表



調査発表(02/24)

- (3) 調査報告書作成
- (4) きのもとほんもの展への参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

昨年は、木之本にある元麴屋「こじへい」を改修するプロジェクトとして活動が始まった。しかし、予算や使い手が定まらず着工することができなかった。その反省点として、学生と町の人との交流が少なく、また木之本の歴史や街並み、住人、店舗や施設について知らないことがたくさんあることが問題点にあがった。そのため、今年度は学生による町並みの調査を中心に取り組み、町のイベントなどにも積極的に参加することに決めた。木之本をより詳しく知ることで、古民家の改修の手がかりとなり、今後の活動に繋げていくためのベースを確立しようとした。秋から本格的に、木之本を訪問し、歴史や街並みについて調査した。そこで、地域の方と会話したり、地域の商業施設や産業の魅力を改めて感じることができ、町をより知りたい、より関わりたいとメンバーの方向性が固まってきた。

調査したことまとめ、木之本街並み研究会で木之本のみなさんの前で発表させていただく機会をいただいた。町の人と意見交換する中で調査の不十分なところや、新たな発見を感じた。もっと木之本のみなさんにヒヤリングを行い、意見交換をする必要がある。

来年度の活動はすでに動き出している。中山郁英さんが木之本の町家に移住し、そのリノベーションをすることを考えられている。その計画を建築家の大井鉄也さんと私たち学生と共に進めていきたいと考えている。計画するにあたって、町家を実測し図面にする作業を始めている。今年度、調査したことをベースに木之本の可能性を考え、さらに精力的に活動をしていきたい。

活動を通して学んだこと (抜粋)

町をいろいろな視点で見ることで、地元の人に自分から話かけ話を聞くことの大切さを学びました。文献でわかること、地元の人話を聞いてわかること、それぞれで情報を得ることができました。また、年齢によっても町の見方が違うと感じました。一つの地域をさまざまな面から知る楽しさを学ぶことができました。

中島優 (環境建築デザイン学科 3 回生)

リサーチのやり方を学ぶことができました。実際に住民の方に話を聞いたり、その土地を歩く事によって得られる情報がある事を学びました。得られた情報のまとめ方や人に見せるためのレイアウトの仕方も学ぶことができました。そのおかげで木之本の歴史や町並みについて深く知る事ができました。

祝嶺龍 (環境建築デザイン学科 3 回生)

実際に足を運ぶことに新しい人と出会い、町の人と触れ合うことで、木之本の魅力を体感していききました。また、活動を通して木之本のために動いている若者の存在を知りました。接する内に、町づくりの手法を学ぶことができました。今後は学んだことを生かして改修を進めていきたいと思ひます。

田口真帆 (環境建築デザイン学科 3 回生)

地域からのコメント (抜粋)

一般社団法人滋賀人 代表理事 中山郁英さん

地域で当たり前のように思われているような生活文化の魅力は、外の目で見るとこそ気づくというものもあるのだらうと思ひます。地域に大学生が関わるといふことは、新たな目線で見ると地域の魅力や特徴が発見される、とても意味のあることだと思ひます。調査では、うだつの形式や格子の形状など、普通に生活していると見逃してしまふような部分にも丁寧に目が向けられており、何度も現地を訪問された成果が詰まったものであつたと思ひます。「街並み研究会」での発表では、地域の方々も興味深く話を聞かれ、厳しい質問も出てしまふましたが、そういった質問をしたくなるような、よい調査発表だつたということではないでしょうか。(力作の街並みスケッチも好評でしたね!)

指導教員より (抜粋)

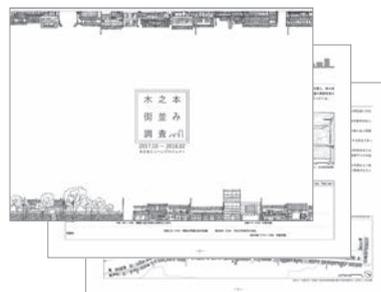
環境科学部 川井操

今年度、本プロジェクトでは、北国街道沿いの施設分布状況、間口・奥行き、ファサードの現況調査を行い、さらに文献調査資料によつて、町家形式、路地と街道の関係から木之本の町並み形成プロセスを解明した。これらの成果は「木之本街並調査」報告書としてまとめられ、2月に木之本街並み研究会の皆さんへ成果発表をして、意見を交わした。

また10月には、実際に改修された町家の視察を行った。設計された本学OBの大井鉄也氏に案内をしていただき、湖北の厳しい環境に対応した二重窓や大きな町家を現代的に住みこなすために入れ子状の形式を採用したといふお話を伺った。大井氏には、その後も調査方法や町家の特性について、学生指導して頂いた。また本学非常勤講師で建築家の辻琢磨氏にも3回にわたつて調査方法や研究指導をして頂いた。

チームには、引き続き地域との連携を続けて、研究テーマを掘り下げ、さらに実際に地域や外来者に開けた町家改修に取り組むことを期待したい。

DELIVERABLE 成果物 / 制作物



木之本町並み調査報告書

16 フラワーエネルギー「なの・わり」



植物でエコな活動しませんか？

植物を用いた資源循環型社会の形成を目標として、休耕田や学内の空き地を利用して菜の花およびひまわりを栽培し、そこから油を搾りだして燃料を生産します。また、小学校を対象としたエネルギーに関する授業も行っています。

TEAM DATA

チーム名：フラワーエネルギー「なの・わり」
代表者：梅野遼平（工学研究科）
メンバー数：16名
指導教員：山根浩二、河崎澄（工学部）
活動場所：彦根市
関係団体：菜の花プロジェクトネットワーク
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 菜の花・ひまわり栽培



菜種刈り取り (06/23)

(2) 小学校出前授業

★見出し写真：城北小学校出前授業 (07/11)

(3) 高大連携授業

(4) ワークショップ



ヤンマーミュージアム秋祭り (11/04)

(5) イベント参加

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年はひまわりの種まき時期を早めたおかげで収穫量が増えました。また、昨年引き続き畑に行く回数を増やし、できるだけ雑草を少なくできたのも良かったと思います。

菜の花の搾油については、今回、不純物が多く油が腐ってしまい、十分な油を取ることができませんでした。収穫した種の乾燥期間が長かったこと、乾燥させる場所が悪かったことが原因ではないかと考えています。搾油するときには完全に乾燥していましたが、それまでに種が腐敗するなどの悪影響があったのではないかと思います。

小学校の出前授業では、子どもたちに授業や実験を楽しんでもらえ、地球温暖化やエネルギーについて興味をもってくれたかなと思います。また、環境についてのクイズもみんな真剣に考えて、ほとんどの問題に正解し、理解を深めてくれたのではないかなと思いました。

今年も引き続きヤンマーミュージアムでのワークショップを行いました。ヤンマーミュージアムの方と何度も打ち合わせをして、子どもたちが楽しめるような実験や工作ができたかなと思います。また、県外から来られた方もいたので、なのわりの活動も広い範囲で知ってもらえたかなと思います。今後はバイオディーゼルカーを使ったイベントをぜひやってほしいとのことだったので、そのイベントについても考えていきたいと思っています。

今年は小学校の出前授業を2校に増やし、広報活動の場を広げました。来年度は、さらなる広報活動の拡充を行いたいと思います。

活動を通して学んだこと

なのわりの畑での作業を行うことで、種まきや草刈り、収穫など菜種油の搾取までの様々な工程を学ぶことができた。また、長い時間をかけて植物を育てることの難しさを知ることができた。今年度学んだことを来年度に活かして、活動を行っていきたいと思う。

大木勇生（機械システム工学科4回生）

菜の花やひまわりの栽培の難しさを学ぶことができた。毎週雑草を刈り取ったり、水やりを行ったりしても思うように育たず、農作業の大変さを知った。またワークショップや出前授業において、子どもたちとのふれあい方を学んだ。来年度も引き続き、地域のためになるような活動を行っていききたい。

竹村知浩（機械システム工学科4回生）

菜の花の栽培から油の搾取までの工程を学び、同時に農作業や油の生成の大変さを学んだ。また、小学校の出前授業やヤンマーミュージアムのワークショップを通して、子どもに教える側の視点や企画・運営する立場を経験し、難しさを実感した。なの・わりの活動を通して普段経験できない事を経験できた。

樋上品大（機械システム工学科4回生）

地域からのコメント

お借りしている畑の所有者 吉島利博さん

一年間お疲れ様でした。本年度は、ひまわり油は、昨年度よりも多くとることができてよかったと思いますが、菜の花に関しては、天候に恵まれずに豊作とはいえない結果になったのは残念に思います。農作物は時期に敏感であり、今回は種を撒く時期が遅れてしまったので、それが原因だと思います。学業の両立等で難しいとは思いますが、来年度は時期を守ることを心がけて頑張ってくださいと思います。

指導教員より

工学部 山根浩二

本年度は、菜種の収穫後に作付けしたひまわりも、背丈も揃って良く成長していたようで、種の収穫量も例年になく良かったようです。菜種については、搾油した油が腐ったことは残念です。原因を究明して次年度に活かしてもらいたいと思います。また、小学校への出前授業も、もうそろそろメニューを一新しても良いのではないのでしょうか。

「なの・わり」の取組は、国連のSDGsの17の目標の「7. エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」に関連していることから、次年度は、とくに子ども達へのエネルギー環境教育をSDGsの観点に立って進めてもらいたく思います。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



菜の花栽培



小学校出前授業



高大連携授業

<その他成果物>

ヤンマーミュージアムでのワークショップ

17 おとくらプロジェクト



高宮に新しい風を吹かせよう！

旧中山道高宮宿をより元気にすることを目的に活動しています。築200年の古民家を学生が改修してできたコミュニティスペース「ギャラリー喫茶おとくら」の運営を軸とし、地域活動への参加、イベントなど幅広い活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名：おとくらプロジェクト
代表者：岡田優太（環境科学部）
メンバー数：30名
指導教員：迫田正美（環境科学部）
活動場所：宿駅 座・楽庵（彦根市高宮町）
関係団体：高宮経友会
近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 喫茶活動

★見出し写真：コーヒードリップ講習会 (06/11)

(2) イベント活動



台湾学生交流会 (07/14)

(3) ギャラリー活動

(4) 座・ギャラリー活動

(5) 広報活動

(6) サマーフェスティバル出店



高宮サマーフェスティバル (08/13)

(7) 豊郷ミツマルシェ出店

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

おとくらプロジェクトは地域の方々に支えられて成り立っている団体だということを改めて実感する年であった。アートナビ、アコースティックギターワークショップ、座や輪々におけるギャラリーの展示など、地元の方々や常連の方発信の企画を多く行うことができた。

また今年度は、来年度の飛躍に向けての準備段階として位置づけることのできる年であった。団体としての活動だけでなく、個々のメンバーがおとくらメンバーの一員として多くの外部事業に参加したり対話を重ねていくことで、より多くの人におとくらプロジェクトの存在を知っていただけたり新たな事業への参加のお誘いを受けるようになった。

大きな課題は二つである。一つ目は、チーム内での情報の伝達、及び役割の分担や引継ぎがうまくいっていないことがあげられる。しかし、インターネット上で共有のメール・ドライブ機能を活用できるようにする、各班内で仕事のマニュアル化を徹底し引継ぎの際の負担を減らすなど、具体的な改善策が上がってきている。これらを来年度に向けて実行していくことで改善が見込まれる。

二つ目は、イベントへの参加率の低さである。例年行われているイベントについては時期が決定しているため多くのメンバーが集まるが、新たな事業やイベントへの参加のお誘いを受けた際に人数が集まらずお断りせざるをえないという状況が度々見られた。また土日のシフトが一人しか確保できないことも複数回あり、座・楽庵内で開催されるイベント時にも通常のシフト人数(3~4人)のことが多く今後のおとくらプロジェクトの発展に向けて大きな課題となっている。改善のためにはシフト・イベントともに、早めの計画とメンバーへの伝達が重要となる。メンバー間の情報の共有を意識する必要がある。

今年度は地域の方からの発信が多かったため、来年度は学生の側からより多くの地域の方を巻き込んで高宮の発展に貢献していくことのできる企画を行っていききたい。

活動を通して学んだこと

おとくら喫茶という空間の温かさを感じた。おとくらは私たち学生と地元から県外まで多くの人々が出会い、会話を楽しんだりすることができる。人とのつながりや支えがおとくらでの居心地の良さを感じさせている。これからもおとくら喫茶をよりよい空間としていけるように活動に励んでいきたい。

浅井恵（人間関係学科1回生）

高宮サマーフェスティバルでは自分たちが作ったもので小さい子どもに遊んで喜んでもらえたり、コミュニケーションが取れたのがとても楽しく、経験の一つとなった。

池松律香（生活デザイン学科1回生）

おとくらの通じ、多くの人と長い時間お話しすることができたのでとても楽しいと感じた。今年度はイベントの参加がなかなかできなかったため、来年度はもっとイベントに参加して充実したものにしたいと思う。

和田安純（生活栄養学科1回生）

地域の方から話を聞きおじちゃん世代の学生時代のことや文化、人として大切な価値観をたくさん学ばせてもらった。サマーフェスや湖風祭などいろんなイベントにも関わらせてもらい達成感を得た。たくさんの人と関わることを通して一回り大きく成長できた。今後も何か地域に貢献できることをしていきたい。

石神愛海（人間関係学科1回生）

地域からのコメント

おとくら家主 加藤義朗さん

自称おとくら応援隊隊長としておとくらメンバーと一緒に楽しませていただきました。そして今日、六代目代表鈴木亜実（アプリ）が訪ねてきてくれました。これがあるので隊長はやめられません。来年度は九代目辰巳佳穂（たつみん）中心に高宮に新しい風よろしく願います。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

毎週の喫茶の運営、毎月のギャラリーの準備と手配、広報など、地道な作業をベースにしている中で、外部のイベントにも積極的に参加したことは、多くの方々との出会いにもつながり、今後の活動に向けた良い経験であったと思います。

活動の引継ぎやメンバー間での情報の共有などは例年持ち上がる課題ですが、各班からのアイデアも出ているようなので、互いに意見を持ち寄り相談と工夫を重ねて、おとくらしい活動を展開してくれることを期待しています。

DELIVERABLE 成果物／制作物



おとくらつうしん



湖風祭宣伝チラシ

<その他成果物>

座・ギャラリーチラシ
 ギャラリー輪々チラシ
 おとくら寄席チラシ
 ギターワークショップチラシ
 アートナビチラシ

18 内湖の再生と地域の水辺コーディネート



守ろう！琵琶湖の在来魚

琵琶湖の内湖、彦根市内・神上沼や野瀬川においてブラックバスやブルーギルなど、侵略的外来種を駆除するとともに在来種のモニタリング調査を行なっています。人々がもっと水辺に親しんでもらえるような啓発活動も行なっています。

TEAM DATA

チーム名：滋賀県大生き物研究会

代表者：山田智行（工学部）

メンバー数：12名

指導教員：浦部美佐子（環境科学部）

活動場所：神上沼、野瀬川、滋賀県内

関係団体：全国ブラックバス防除市民ネットワーク、琵琶湖博物館

近江楽座活動年度：2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) 神上沼における活動

★見出し写真：神上沼の活動 (04/16)

(2) 野瀬川における活動



野瀬川調査 (05/28)

(3) 曾根沼における外来魚駆除釣り大会



解剖体験 (05/28)

(4) 土地改良区生き物観察会

(5) 外来魚駆除協力隊の活動

(6) 展示による啓発活動 水族展示「県大ミニ水族館」

(7) 湖風夏祭

(8) びわ博学生ミーティングにて 活動成果報告

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は数多くの先輩方が活動から離れられたことで活動の主体が経験の浅い新しいメンバーであった。しかし、新メンバーも活動を通して多くの知識を身につけることで、スムーズな活動が行えた。さらに、2回生以降で今年度から活動に参加してくれる学生も多く、また、新メンバーを含めた全員が活動の目的を理解し、それぞれが活動の中で自分の役割を果たすことができた。昨年度より駆除活動だけでなく、観察会といった啓発活動に参加するメンバーが多くなり、地域の人々に水辺の環境について知ってもらおうという目的意識がメンバーの中でより強固なものになったと感じられた。

今年度、新規プロジェクトとして野瀬川での活動を開始した。今まで活動を行ってきた神上沼と環境が違うため、調査方法も神上沼とは違った方法で行なった。また、調査地点も離れているため二手に分かれ、一方を新しいメンバーに任せて調査を行なうこともあったため、新メンバーの活動における自主性が育まれたと感じた。来年度も新たなことに挑戦する気持ちを持つとともに自分たちの活動を見直し改善していくことを心がけていきたい。

昨年度と同様、他団体や行政が主催するイベントに補佐役として参加するとともに、地域の方々を対象として外来魚駆除釣り大会を自らで主催するなど、積極的に地域の方々に関わることが出来た。自主開催のイベントでは、より多くの方が水辺の環境に親しみや興味を持つような機会を提供することができたり、地域の方々との触れ合い方やイベントの開催の仕方などのノウハウを残すことができた。今後は自主開催のイベントを増やすことで徐々に実施体制の経験を積んでいき、新メンバーのスキルアップおよび後世への引き継ぎをしていきたい。

我々の活動は多くの人々、組織や企業、行政の方々の協力によって支えられてきた。そんな方々の期待に応えるためにも、より高みを目指し、活動を継続していく。

活動を通して学んだこと

投網など普段体験できないような貴重な体験の機会を頂けたが、啓発活動等はただ参加したに留まってしまった。なぜなら、私が魚類の種や性質についての知識に乏しかったためである。今後は知識をつけ、啓発活動を主体的に行なえるようになりたい。

橘啓輔（環境生態学科1回生）

この活動に参加する前は魚を釣りやタモ網でしか捕まえたことが無かったが、投網の投げ方を覚え新しい捕獲方法を身に着けることができたり、今までは参加する側だった外来魚駆除釣り大会に補助スタッフとしてかかわることができたりととても刺激的な1年でした。

巖嶋伸（環境生態学科1回生）

活動で学んだことは、地域の人とのつながりの重要性である。何回かの活動を通してスタッフの方々との友好的な関係が築けていたので、来年もこの活動を行い、友好的関係を続けていきたい。

東和宏（環境生態学科1回生）

活動を継続して続けていくためには、多くのメンバーに活動に参加してもらう必要があるが、今年度は活動への参加メンバーが少ないことが多かった。数多くのメンバーへ参加を促すためには普段の活動以外においてメンバー同士で交流する機会を設ける必要があると感じた。

山田智行（機械システム工学科3回生）

地域からのコメント

にじいろ Kids 代表 高尾裕貴子さん

生き物研究会の皆様と活動を共にして3年目を迎えました。一年目は、大学内の川に入り生き物採集を。二年目は、曽根沼にて外来魚釣りを。そして今年度は、外来魚釣りとは解剖を体験しました。解剖は初めての子が多く、とても貴重な経験となりました。特に5年生の子どもたちは、うみのご乗船にあたり琵琶湖について学習の機会がありますが、それに関連し、実際に琵琶湖に棲む外来魚を釣り、生態や食物連鎖を調べることにより深い学びに繋がりました。また、保護者が釣りをする機会がないと子どもも機会を得られにくいのですが、専門的な知識と技術をお持ちの皆様をサポートいただけたおかげで、そういった子どもたちにも機会が得られました。親子での体験によって話題が家庭に持ち帰られ、家庭毎に環境や生き物について関心を持ち、考える機会が持てたことは大変有意義でした。

今後も皆様の益々のご活躍を願うとともに、地域での新たな取り組みと展開に期待します。

指導教員より

環境科学部 浦部美佐子

そろそろ、創設期（県大 Bassers）のメンバーが完全に活動を離れる年代となりましたが、外来生物対策を中心とした保全是息の長いアクションが必要になります。新規メンバーは先輩たちからの財産を引き継ぐと共に、新しく主体的な活動の計画を立て、一人一人が活動を自分たちのものとして継続していくよう心がけてください。そのうち地域から県大に進学し、新メンバーになってもらえるような小中学生がいるとよいですね。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



投稿論文
「琵琶湖内湖の神上沼における魚類相」

19 男鬼楽座

茅葺き屋根の葺き替えを体験しよう

彦根市男鬼町を中心に、山間集落を通して文化的景観資源の保存と活用を考えます。毎年7月には茅葺き屋根の葺き替えイベントを開き、楽座メンバーや職人の方に加え、多くの他大学生・一般の方を招いています。

TEAM DATA

チーム名：男鬼楽座
代表者：中島和紀（人間文化学部）
メンバー数：25名
指導教員：濱崎一志、石川慎治（人間文化学部）
活動場所：彦根市鳥居本町男鬼
関係団体：湖北湖民家再生ネットワーク、彦根景観フォーラム
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016



PROJECT

実施事業

(1) 男鬼での葺き替えイベント



男鬼での葺き替えイベント (07/17)

(2) 城楽邸での葺き替えイベント

(3) 栗栖での葺き替えイベント

★見出し写真：栗栖葺き替えイベント (10/28)

(4) 伊吹山での茅刈りイベント



茅刈りイベント (11/25)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

男鬼楽座は、茅葺きの技術の伝承・結システムの伝承・歴史的建造物の保存という3つの目的を持ち1年間活動してきた。

今年度の事業を行っていく中では、一人では出来ない作業を仲間とともに協力して行い、参加者全員がやりがいをもって活動に取り組むことが出来た。

どのイベントでも職人さんをお招きし、その都度、茅葺き技術を教えてもらい、実際に体感して学ぶことが出来た。しかし、簡単には職人さんのように作業が出来るわけではない。そのため、葺き替えに必要な縄結びの講習をするなど、事前に技術を先輩方から学んでおくことが重要であると痛感した。

そして、職人さんから教わったことを自分だけでとどめておくのではなく、他のイベント参加者の方に教えることができた。また逆に他の参加者から自分たちの知らないことを教えてもらうこともあり相互に技術の伝承が出来るように動けたのではないかと考えている。以上のことより、技術の伝承という面では、申請時の目的を達成することができたと考えている。

しかし、「結」のシステムの再構築という面から見ると、達成度は高いとは言えないだろう。栗栖でのイベントでは、男鬼楽座が目指す「結」のシステムの構築することができたが、男鬼や城楽邸でのイベントにおいては地域住民の方々の参加が少なかったため、男鬼楽座が目指す「結」を形成することは出来なかった。そのため、次回からの活動では、男鬼楽座の活動をより多くの人々に知ってもらう方法を模索していく必要があると考える。

活動を通して学んだこと

各イベントを通じて、めったにできない経験を得ることができた。また、代表として運営していく中でさまざまな困難があった。しかし、先生やチームメンバーと協力し、なんとか今年度の活動を終えることが出来た。運営していく中で、チームワークの大切さを学ぶことができた。

中島和紀（地域文化学科3回生）

地域に関わることができて良い経験になった。限界集落が抱える課題を考えるきっかけになり、これからもこうした地域に関わるイベントに積極的に参加していきたいと思っている。

福田恭輔（地域文化学科3回生）

イベントを通して、伝統的な資源を残していくことの価値を考えるようになった。新しいものだけでなく、古くからあるものに対して学生にもっと興味を持ってもらいたい。活動してきたことが地域の活性化につながると実感できるように、継続していくことが大切であると学んだ。

山田奈津美（地域文化学科3回生）

イベントを多くの人を巻き込んで実行することの大変さを知った。今後も継続して大学生と地域が関わることでできるイベントを開催していきたい。参加者と交流できたことも印象に残っている。

田中杏佳（地域文化学科3回生）

地域からのコメント（抜粋）

多賀クラブ代表 栗栖での葺き替えイベントで共催 中川信子さん

多賀町栗栖にある西村商店の茅葺き屋根の修理に滋賀県立大学の学生さんが参加してくれました。男鬼での経験をいかし、過酷な条件の中でもみなさん元気いっぱい作業をしてくださり、道側の屋根の差し茅作業を完了することができました。2日目には県立大学の先輩で茅葺き職人として活躍している大野さんも来てくださり、一緒に作業しながらいろいろ指導いただきました。

かつて茅葺き屋根は地域の人の手によって守られてきました。地域によって、茅葺きの材料は違いがあります。そんな違いからもその地域のことを知る手掛かりになり、人々の営みが自然環境によって違う日本の風土を学ぶいい機会にもなります。昔の暮らしを知ることは未来を担う学生さんにとって大きな力になることでしょう。茅葺き屋根は人々のつながりによって守られるので、ぜひ息の長い活動を続けてほしいと思います。

指導教員より（抜粋） 人間文化学部 濱崎一志

昨年度から開始した多賀町栗栖の西村邸の葺き替えイベントは、活動の幅を大きく広げることができた。彦根景観フォーラムや多賀クラブ、桃園プロジェクト、栗栖の住民の協力を得られたことも大きな成果だった。男鬼・大久保邸や上丹生・城楽邸の葺き替えや茅刈りイベントも、湖北古民家再生ネットワークなどと協働で、計画的に進めることができた。イベントの準備、実施、成果の公表なども着実に遂行することができた。

また、古民家の活用の視点から男鬼楽座のメンバーで進めている古民家の公開イベントも着実に実施できた。琵琶湖博物館、NPO 法人文化と景観研究会、濱崎研究室、市川研究室が協力して実施した近江八幡円山の旧北川家住宅の公開イベントも、旧北川家住宅の活用とともに大きな成果を上げることができた。

少子・高齢化の進行により空き家の増加、地域の活力の衰退など様々な問題が増えつつあるなかで、空き民家を活かした地域の活性化を計る事業が、持続可能な形でさらに幅広く展開されることを期待します。

DELIVERABLE

成果物／制作物



葺き替えイベント

20 タクロバン復興支援プロジェクト



住民と共に場所をつくる

台風により大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島タクロバンで復興支援を目的に活動しています。コミュニティの再建をめざして、場を作るだけでなく作る過程や調査などを地域の方と行き交流を深めることを重視しています。

TEAM DATA

チーム名：タクロバン復興支援プロジェクト
代表者：大野宏（環境科学研究科）
メンバー数：10名
指導教員：荻澤竜一、JR. ヒメネス、ベルデホ、川井操（環境科学部）
活動場所：フィリピンレイテ州タクロバン
関係団体：タクロバン市役所
近江楽座活動年度：

2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
2011	2012	2013	2014	2015	2016	

PROJECT

実施事業

(1) タクロバンの生活調査



住宅実測調査 (08/10)

(2) NewHopeVillage の調査と交流



コミュニティミーティング (11/21)

(3) 設計案の作成と現地モックアップ

★見出し写真：教会フレームモックアップ (03/12)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

昨年まで被災の状況に対する現地の動きになかなかついていけず、様々な計画が難航してきたが、今年度の活動として、被災から4年が経つ中での状況変化を見ながら、現地調査・建設計画の作成・建設のための案作成とモックアップと一連の動きを捉えながら計画できたのは大きな成果である。現地での生活の調査では、被災が起こってからの状況変化のプロセスを捉えるものとなり、何度も足を運ぶ中で復興というものを理解できるようになった。また初めて足を運ぶ人にはこのような記録を見せながら、途上国の地域で起こる現状を目にし「地域」「建築」「生き方」等、ものごとを深く考えるきっかけとなっているように思える。

実際の計画として「仮設の教会兼コミュニティスペース」の計画を進めているが、被災から4年が経った今、復興が進行して行くことによって、被災当初にあった住民の生活のしかた等を見過ごしそうになってしまう。近江楽座のプロジェクトとして地域に根ざし、元々の目的である住民目線での復興支援ということを忘れずにこのプロジェクトを進行していく必要があると考える。また今年度の活動として、フィリピンということもありチーム全体での進行ということに対して難しい部分があった。このことに関して来年度からは考えていく必要がある。

活動を通して学んだこと (抜粋)

被災から4年が経つ中で、現地の変化を多く感じた。途上国ならではの力と、現地の人の生活力をすごく感じた。このような生活環境を見つめながら自分たちが何をすべきか、どうすることが出来るのかを考える活動となった。現地の状況を見つめ、計画し、実際に建設する難しさを感じたが、実現できるよう努力したい。

大野宏 (環境科学研究科環境計画学専攻2回生)

台風ヨランダ以降、変わりつつある海沿いのスラムの風景や政府によってつくられた常設住宅の風景を目の当たりにした。日本で暮らす自分からすると決して豊かとは言えないが、彼らが置かれた状況で最大限に豊かな生活を営んでいる力強さを感じた。このプロジェクトによって豊かさとは何かを考えるきっかけになった。

坂口大智 (環境建築デザイン学科3回)

今年度、タクロバンに行くことが出来なかったが、現地で行われた調査内容を見ることによって現地の変化を多く感じる事が出来た。この3年間のプロジェクトの中で日本との差異や共通点が見え、その地域で活動すること、地域の建築のあり方を考えるきっかけとなった。

浅井翔平 (環境科学研究科環境計画学専攻2回生)

地域からのコメント

現地協力者 Lionil Bato

タクロバンに毎年足を運び、現地を調査することによってタクロバンの生活を理解しようとしている。タクロバンの多くの場所に足を運び、日本とは違うものを学んでほしい。今年はNewHopeVillageでのコミュニティの問題に対して問題意識を持ち、その計画と実験をおこなっていた。現地 NPO やコミュニティとともに建設するのに多くの困難があると思うが頑張してほしい。

指導教員より

環境科学部 J.R. ヒメネス・ベルデホ

プロジェクトの主な目的は台風ヨランダの後のタクロバンの再建である。地域の人々の視点で調査を行うこと、地元材料と地域住民で建物(仮設の教会・コミュニティスペース)を建設することがキーワードである。

タクロバンの街の北部、市役所と NGO によって建設された常設住宅のところは今夏のプロジェクトの建設場所である。この常設住宅は、沿岸地区に住み、移住を余儀なくされた人々のコミュニティから構成されている。この場所は安全ではあるが、建物のデザインと建設について、現地 NPO と地域住民の間で話し合われることがなく、住居が単純に並べられた形となっている。

被災から4年が経ち近江楽座のプロジェクトによって、この空間が参加者を巻き込み地区を活性化しよう機能し、未来に役立っていくことを願う。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



建設計画中の教会の模型



教会の床のモックアップ



屋根梁モックアップ

<その他成果物>

建設計画中の教会の軸組模型

教会のフレームモックアップ

教会の Joint Sample

21 Taga-Town-Project



多賀の魅力を再発見！

多賀町を拠点に町の魅力を再発見し、町内外に発信する活動をしています。「一箱古本市」を多賀町内で継続的に開催するとともに、様々なイベントのお手伝いする機会等を通じて、多賀の魅力を発掘、発信しています。

TEAM DATA

チーム名：Taga-Town-Project
代表者：石見春香（環境科学研究科）
メンバー数：6名
指導教員：迫田正美（環境科学部）
活動場所：犬上郡多賀町
関係団体：多賀木匠塾、多賀町商工会、門前町共栄会
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

- (1) 一箱古本市
- (2) 八重練プロジェクト
夏休み宿題お手伝い企画 (08/08)
- (3) 多賀ふるさと楽市



多賀ふるさと楽市 (10/15)

- (4) ふるさと多賀の食まつり
- (5) お手伝い
- (6) イベントへの出店
- (7) 地域訪問
- (8) 展示



活動紹介 (03/04)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

本年度は学生自ら進んで企画する活動より、元々あるイベントに協力するような形で動くことが多かった。このため少人数でもできることが増え、去年度より活動頻度が多くなり、TTPについて知って頂く機会も増えたように思う。少人数であっても活動が縮小することはなく、多賀町内外の方々の協力を得て活動は充実したものになった。これからも、イベント企画の協力を呼びかけたり、他の近江楽座団体との連携をしていきたい。

情報発信では、SNSやホームページの更新頻度が少なくなってしまうので、その改善と、紙媒体の充実が課題である。多賀町に興味をもってもらい、研究や仕事、移住、農業体験、教育の対象になっていくような情報や場づくりを「多賀暮らしの図鑑」プロジェクトでできたらと思う。

一箱古本市については、毎月、出店する機会があった。一番大きなイベントとしては、「ジャパンコーヒーフェスティバル」が多賀大社参道で行われ、TPPも出店し多くの出店者さんとお客さんとの交流があった。また、限られたスペースで、その場所に合った古本市の出店アイデアを出し、「良い雰囲気が出ている」と言ってもらえ、ディスプレイの工夫ができた。今後も簡単にDIYできるようなディスプレイの方法を考えて、他の出店に応用できるようにしたい。

また、「多賀語ろう会」への参加はTTPの活動の飛躍に繋がった。「ふるさと多賀の食まつり」というイベントでは、多賀の郷土料理を紹介するため、今の親子さんたちには動画でなら見てもらいやすいのではと、動画づくりにも挑戦し、より魅力的に伝えることが出来、表現の幅が広がったように思う。

来年度は、色々なデザインの手法や動画づくりといったPRの手法を活かして、「暮らしの図鑑プロジェクト」を中心に、多賀の魅力を伝える広報に力を注ぎたい。

活動を通して学んだこと

多賀町にも住み始めて、TTPの活動にも大きな影響が出始めた年だった。特に、町の人と会う機会が多くなることは、次のイベント企画や、お手伝いに動きやすくなったりと、良い影響があったように思う。次は、多賀町民と言う立場から、TTPや学生に多賀に入ってもらうきっかけづくりをしていきたい。

石見春香（環境科学研究科環境計画学専攻2回生）

先輩や後輩の後についていく、という形ではあったが、参加できてよかった。地域に外からお邪魔させていただくため、礼儀は必要だが、肩の力を抜いて人と話すというのも大切だと感じた。あと、「たまにその地域を訪れる」よりも、生活の一部とするほうがいろいろなことを感じるができると思った。

阪本ひかる（環境政策・計画学科4回生）

新中央公民館準備部会「多賀語ろう会」主催のイベントに学生スタッフとして参加できたことが、一番の成果であると思う。学生目線で実現可能な意見を出し、計画を練り、実行につなげられたことが今後の活動のきっかけとなったと思う。

龍見瑞季（環境生態学科1回生）

地域からのコメント（抜粋）

多賀町教育委員会事務局生涯学習課 石丸茜さん

多賀町では、平成31年度に新しい公民館が開館する予定で、地域の人が気軽に集うことができ、まちづくりの拠点となるような場所を目指しています。

生涯学習課では、「多賀語ろう会」という組織をつくり、職員、地域の方、新公民館の設計者など多様な人たちが集って、公民館の開館に向けてのひとづくりを考えています。取り組みの一環として、昔から多賀町でつくられていた郷土料理を記録し、伝えていく「ふるさと多賀の食まつりイベント」を開催しました。この中で、TTPの皆さんにはイベント当日だけでなく、準備段階から関わってもらいました。郷土料理の記録を残すために、動画を作成することやそれらをインターネット上で公開することなど、若い世代の発想で企画を提案してくれたり、レシピや調理の工程を記録し、1分程度の短いレシピ動画として見やすくまとめてくれたりしました。動画は大変好評で、もっとたくさんのレシピを記録できればという思いです。

今後もSNSの活用など、学生の皆さんが得意とする分野で協力してもらえること、そして何より、継続して学生さんが参加してくれると大変嬉しく思います。若い力が加わると事業に活気が生まれ、地域の方もとても喜んでくださいます。ぜひ、今後も一緒に活動を進めていければと思います。

指導教員より

環境科学部 迫田正美

TTPの活動にとって様々な意味で節目となる1年であったように思われる。メンバーが町で暮らすことで、これまでとは異なった視線とスタンスを持てたことは大きな収穫であった。また、住民として多賀町の将来に向けたプロジェクトにも参画の機会を与えていただいたことも今後のTTP、多賀タウンプロジェクトとしての新しい展開へ向けた大きなステップとなることを期待している。

DELIVERABLE 成果物／制作物



まちあるき MAP



夏休み宿題お手伝い企画チラシ

<その他成果物>

Taga-Town-Project 活動紹介パネル

一箱古本市チラシ

古本市ディスプレイ製作

古本市おしり

新入生勧誘チラシ

神あかり出店メニュー表

多賀ふるさと楽市チラシ・ポスター

ふるさと多賀の食まつりの看板・動画等

22 たけともミライ



地域に寄り添い、笑顔の集まる場をつくる

宮城県気仙沼市に復興の拠点となる場所を作りたい。陶器研究室が中心となって始動したのが「竹の会所」プロジェクト。竹の会所を拠点に地域と交流を続けています。今年度からよりよいミライを共に考えたいという気持ちを込めて改名し、活動を続けています。

TEAM DATA

チーム名：たけともミライ
代表者：千葉駿太郎（環境科学研究科）
メンバー数：19名
指導教員：陶器浩一、山崎泰寛（環境科学部）
活動場所：宮城県気仙沼市
関係団体：（株）高橋工業
近江楽座活動年度：
2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010
2011 2012 2013 2014 2015 2016

PROJECT

実施事業

(1) たけとも春ワークショップ



まちあるき (05/04)

(2) たけとも夏ワークショップ



補修作業 (09/12)

★見出し写真：たけとも写真展 (09/17)

(3) 竹の会所緊急補修

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

震災から6年が経過し、私たちが活動の拠点を置かせていただいている気仙沼市のようすも大きく変化しました。私が活動に参加し始めた2013年にはガレキが残っていた大谷漁港はきれいに整備され、高さ9mの防潮堤の計画が決定しました。竹の会所で虎舞の練習をしていた子どもたちは、今は高台に新しくできた公民館で練習をしています。インフラの整備が進み、まちの姿が変わっていく中で、わたしたちの活動に果たしてどんな意味があり、これからどこに向かうべきなのか、活動を続けながらずっと悩み続けています。

そんな中で、今年の夏まつりで、子どもを連れて遊びにきてくださったひとりのお母さんから、「うちの子どもは、竹の会所で虎舞の練習をしたことがない。でも、虎舞の練習で出会ったお兄ちゃんたちから、あそこは大学生たちが来て面白いぞ、と聞いて、きょうを楽しみにしていたんだ。」といった内容の話を聞かせていただきました。実際に活動にかかわる学生が入り替わるように、地域の子どものなかでも世代が入り替わり、これまでにつくられてきた関係性が保たれていることに気が付きました。学生が入り替わり地域も変わっていく中でそのような形で保たれる絆があるとは知らず、思わず目頭が熱くなったことをよく覚えています。

たけともの活動は、震災で傷ついた地域に少しでも元気を取り戻してほしいという気持ちから発足した活動ですが、同時に、私たち学生が地域から、その暮らしや、暮らしに派生するさまざまなことを学ばせていただく場でもあります。その学びの活動は、地域の方々に、いつも大きな力で支えていただいていることを、私は今更ながら強く感じています。

その恩を少しでも返せるように、また、参加してくれる学生が少しでも多くのことを学び、それぞれの生きる力にできるように、これからの活動を進めてゆきたいと考えています。

活動を通して学んだこと (抜粋)

震災当時はどのような生活を強いられたのかを現地の方々に伺いし、私たちの生活の中では非現実的であったことが実際に起こったことを知り、震災の恐怖を改めて感じた。今回被災地へ赴き感じたこと経験したことはこれからの糧に成り得ると感じた。

山崎稜 (環境建築デザイン学科 2 年生)

自分が気仙沼に行こうと思ったのは軽い気持ちで、様々な経験が自分の将来の糧になると思ったからです。しかし5月の活動でものすごく自分の考えが浅はかだと知りました。それは気仙沼の風景を見て、何でもっと早く気仙沼に来て学ぶということをしなかったのだらうと感じたからです。もっと学びたいと思いました。

佐藤允哉 (環境建築デザイン学科 2 年生)

私は、1 年生の頃からたけともの活動に参加してきて今年で 6 年目となった。6 年間も経てば、気仙沼で求められているもの、復興の風景、人の復興全て違う。その中でも私がずっと大切してきたものは変わらない。それは地元の方々との交流だ。3 年ほど前に地元の方に言われた言葉が私の心にずっと残っている。それは、お祭りで人が来ないのもイベントも、という言葉である。震災直後、ゴールデンウィークはイベントもなく、竹の会所に来ることしかなかったが、今は復興が進みいろんなイベントもあり、そっちのイベントに行く余裕も出てきた。復興が進んでいるということだ。という話である。私の中に竹の会所で子どもたちと触れ合ったことはとても大きく残っている。地元の子どもたちにも昔、竹の建物で遊んだなという記憶が残っていてくれたら幸いだ。

成瀬洋子 (環境科学研究科環境計画学専攻 2 年生)

地域からのコメント (抜粋)

(株) 高橋工業 代表取締役 高橋和志さん

震災から 7 年が経過し、地域の状況も変化しています。2013 年に大谷漁港内に建てて頂いた「浜の会所」も 4 年間の仮設建築許可期間が終わって昨年夏に解体が終わり、その場所に防潮堤が計画されています。日門地区の高台に新しい公民館も建設され、伝統芸能「平磯虎舞」の練習場所も竹の会所からそちらに移りました。まちの復興は徐々に進んでいますが、いつ終わるとも知れない土木工事が続く中、更地や手つかずのままの場所も多く、コミュニティの形成はまだまだ進んでいない状況です。

気仙沼を訪れてくれる学生も世代が入れ替わり、震災当初の学生達とはその想いも目的も変わってきていると思います。

継続すること自体が目的ではないので、今、自分たちに何が出来るか、何を学ぶのかを共有して、これからの活動の原点にしてほしいと思います。

指導教員より (抜粋)

環境科学部 陶器浩一

震災後 7 年たつが、最近訪れる度に感じることはまちレベルでの復興は一筋縄にはいかないが出来ることから少しずつ行うことが大事、ということである。その小さな点が集まって全体が元気になってゆくような、小さな復興を積み重ねてゆくことが大事ではないかと感じる。

地域のビジネスプランコンテストの審査に加わらせて頂いた際、高校生を含む若い応募者たちが、「自分が出来ること、自分が好きなことで、地域を少しずつ変えてゆきたい、それでみんなが気仙沼を好きになって欲しい」、と活き活きと話していたのが印象的であった。この街に住む人、特に未来を担う若者が、地域に夢と誇りを持っていることが嬉しく感じられた。

たけともミライに参加する学生も世代が入れ替わり、恒例となっている「たけとも祭り」に来てくれる子どもたちも代替わりしているが、震災を身近に感じない世代でも変わらず絆が保たれている。

これらを見ていて、若者ならではの交流があると感じた。復興という事ではなく、地元愛の生まれるような、未来を築くような、学生だからできる地域に根付く活動を続けていってくれること、また、学生たちもこの活動を通じて、暮らすことの大切さを学んでくれることを期待している。

DELIVERABLE

成果物 / 制作物



たけとも春祭りのポスター



たけとも夏祭りのポスター

2-2 『らくぎしんぶん』

チームが1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「チームのビッグニュース」②「プロジェクト紹介」③「プロジェクト自慢」④「地域の声」⑤「成果と課題」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページに、カラー版のPDF ファイルを掲載しています。ぜひご覧ください。

近江楽座 HP: <http://ohmirakuza.net/>

01 あかりんちゅ

あかりんちゅ

AKARINCHU NEWS

March 31, 2018

あかりんちゅとは
あかりんちゅとは、寺社などからやむなく廃棄されてしまう旗籠、通称「旗ろう」を回収・再利用し、手作りキャンドルの販売、キャンドルナイト・キャンドル作り教室の開催を行っている。モットーは「エコでスローな夜を。」

OKB street 4th Anniversary Candle Night
12月8日に岐阜県大垣市のOKB street 4周年記念イベントにてキャンドルナイトを行いました。嬉しいことに、あかりんちゅとはOKB street が出来て以来、4年間ずっと呼んでいただいています。毎年の開催は1,000席、メンバー全員が作業員ということで到着後すぐに並べ始めますが、その際、大垣市立銀行の方が何人も来て協力してください。おかげでゼロキョー開催時の18時に間に合うことが出来ました。大きな旗籠祭ということで、見に来る方も多く、私たちにとっても充実したイベントでした。準備中は雨が降っていたのですが、並べ終えるころには雨は止み、タイルが濡れ、ろうそくの光が反射し、美しい景色が広がっていました。

地域の声
旗籠通いがしてくれたあかりんちゅを誇りていき、後継者と共有し、継続する事大切と感じ、皆さん力を合わせて「灯り」で過ごす「エコでスローな夜」をより一層広げてほしいと思います。
伊土重幸寿会さんのコメントより抜粋
けこう募金もものごんだけ手作りりのろうソックつてくれるんやわ。(体験教室に来られた観望さん)
福祉の力にも関わっているのがすごい。
(キャンドルナイトに来られたお客様)

あかりんちゅ自慢!
あかりんちゅの自慢といえば、まずはプロジェクトであること、毎年の旗籠回収が自慢です。基本的にはイベントを行った際の旗籠料と販売の売上まで活動しています。もう一つは旗籠外、どこへでも行って活動できること。材料は自分たちが全部持っていくばいばいし、体験教室は早らなところ(祝とか)とコメントが1つあれば活動できます。二つ目はリサイクル活動だけでなく、福祉活動も行っていること。キャンドルナイトの旗籠の製造は福祉団体に材料を渡し、委託しています。

成果と課題
成果としては、まずは旗籠回収の1回3人から5人までメンバーを増やした点、そしてやはりしっかりと軌道に乗せて活動できたこと、私たち、とくに幹事3人はそう感じています。ただ、課題も多く見つかっており、満足不足により、各都府の依頼が少なかったことがその一つです。今後は受け先ではなく、もっと積極的に動いていこうと思っています。

02 未来看護塾



未来看護塾
OHMIRAKUZA

未来看護塾

「未来看護塾」は、未来の看護職を育てるための実践型学習プログラムです。最新の医療技術や最新の看護理念を学び、実践的なスキルを身につけることができます。

未来看護塾では、最新の医療技術や最新の看護理念を学び、実践的なスキルを身につけることができます。また、最新の医療機器や最新の看護器具を使用し、最新の医療現場での実践的な学習を行います。

未来看護塾では、最新の医療技術や最新の看護理念を学び、実践的なスキルを身につけることができます。また、最新の医療機器や最新の看護器具を使用し、最新の医療現場での実践的な学習を行います。



未来看護塾では、最新の医療技術や最新の看護理念を学び、実践的なスキルを身につけることができます。また、最新の医療機器や最新の看護器具を使用し、最新の医療現場での実践的な学習を行います。



未来看護塾では、最新の医療技術や最新の看護理念を学び、実践的なスキルを身につけることができます。また、最新の医療機器や最新の看護器具を使用し、最新の医療現場での実践的な学習を行います。

11 たのうらまちづくりプロジェクト

新競技「海の宝探し」で奮闘



田の浦新聞 2018年3月31日発行

田の浦新聞

発行日 2018年3月31日

田の浦NEWS

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

地域の人の声

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

12 とよさらだプロジェクト

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

地域の人の声

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

13 木興プロジェクト

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

地域の人の声

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

14 人と環境を救う雨水タンク

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

地域の人の声

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

お祭り・イベント出店

田の浦新聞 2018年3月31日発行

今年度の成果

2018年3月31日発行

15 木之本こじへいプロジェクト

木之本こじへいプロジェクト

木之本こじへいプロジェクト

プロジェクトの概要

滋賀県立大学の学生が、地域貢献の一環として、木之本こじへいプロジェクトを実施している。このプロジェクトは、地域の活性化と環境の改善を目的として、地域の課題を解決するための取り組みである。

プロジェクトの具体的な内容は、地域の清掃活動、環境教育の実施、地域住民との交流などである。また、地域の魅力を発信するための取り組みも実施している。

プロジェクトの成果

プロジェクトを通じて、地域の課題を解決し、地域の活性化と環境の改善に貢献している。また、地域の魅力を発信し、地域住民との交流も促進している。

プロジェクトの成果として、地域の清掃活動が実施され、環境教育の実施も進んでいる。また、地域住民との交流も促進している。

プロジェクトの意義

プロジェクトを通じて、地域の課題を解決し、地域の活性化と環境の改善に貢献している。また、地域の魅力を発信し、地域住民との交流も促進している。

プロジェクトの今後の展望

プロジェクトを通じて、地域の課題を解決し、地域の活性化と環境の改善に貢献している。また、地域の魅力を発信し、地域住民との交流も促進している。

16 フラワーエネルギー「なの・わり」

発行日 2018年3月31日 非産 新聞

ひまわりたくさん取れました！

ひまわり畑の様子 8月22日

チームのビッグニュース

チームのビッグニュースとして、ひまわりがたくさん収穫されました。これは、チームの努力の賜です。

今年も2つの小学 校で出前授業！

今年も2つの小学で出前授業を行いました。子どもたちは、とても楽しそうに授業を受けていました。

湖風祭で揚げ餃子

湖風祭で揚げ餃子を作りました。とても美味しくいただきました。

今年も高大連携授業！

今年も高大連携授業を行いました。とても有意義な授業でした。

17 おとくらプロジェクト

おとくらプロジェクト

おとくらプロジェクト

蔵でのイベント

蔵でのイベントを開催しました。とても盛り上がりました。

おとくらプロジェクト

おとくらプロジェクトの概要についてご紹介します。

地域の声

地域の声として、おとくらプロジェクトについてご紹介します。

成果と課題

おとくらプロジェクトの成果と課題についてご紹介します。

18 内湖の再生と地域の水辺コーディネーター

2018年(平成30年)3月31日 土曜日 滋賀県大生き物研究会

守ろう！琵琶湖の在来種

滋賀県大生き物研究会

生き物研新聞

生き物研新聞の概要についてご紹介します。

生き物観察会

生き物観察会の概要についてご紹介します。

外来魚を釣ろう

外来魚を釣ろうという活動についてご紹介します。

2017年を振り返って

2017年の活動を振り返ります。

共通プログラムの報告

3-1 活動の安全確保のためのスキルアップ講座

「近江楽座」
2017年度スキルアップ講座

危機対応講習

場所: 湖風会館(A7棟) 談話室・会議室
対象: 近江楽座学生及び本学学生(50名程度)

<p>危機対応講習(全2回)</p> <p>移動中イベント 改修活動...</p> <p>活動にはあらゆるシーンで様々な危険が潜んでいます。近江楽座ではより安全に地域活動を行うため、専門家を招いて危機対応講習を開催！本学学生なら参加歓迎です！</p> <p>場所: 湖風会館(A7棟)談話室・会議室 対象: 近江楽座学生及び本学学生(50名程度)</p> <p>問い合わせ・申し込み 人数把握のため事前予約をお願いします。 近江楽座事務局 担当: 朝川咲美 TEL: 0749-28-8616(内線:8616) E-mail: info@hokurikaeru.net</p>	<p>第1回 6/23(金) 18:10-20:40 ボランティア活動における実践的安全管理について</p> <p>日常生活を始めボランティア活動時にも様々なリスクがあります。安全管理の基本は、リスクを知ることです。知ることで予測が生まれ、予測から対応が生まれます。この一連の流れを、グループワークを通して実践的安全管理について学んでいきます。</p> <p>講師: NPO 法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA) 深山 恭介さん 学生時代に NPO 法人国際ボランティア学生協会に所属し、海外でのインターンシップや、韓国での国際ボランティア活動などに従事。近江楽座の学生時代に地域活動に参加し、大卒卒業後、日本赤十字の事務所で赤十字の海外支援活動に従事。現在は近江楽座の学生時代に学んだ安全管理の知識を現場で活かしている。現在は NPO 法人国際ボランティア学生協会の理事を務めている。</p>
	<p>第2回 6/29(木) 18:10-19:10 交通事故防止について</p> <p>自動車事故防止と自転車の安全利用等について勉強を交えてお話していただきます。</p> <p>講師: 静岡県警察交通課課長 西口 しお理さん</p>

近江楽座における地域活動をより安全に行うために、実践的安全管理の進め方と、活動にともなうリスクの多い交通事故の防止について、専門家を招いて連続講座を開催しました。

| 第一回 ボランティア活動における実践的安全管理について

日時: 2017年6月23日(金) 18:10~20:40
会場: 湖風会館(A7棟) 会議室・談話室
講師: NPO 法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA) 事業部 深山恭介さん
アシスタント 杉村真子さん(立命館大学3回生)

<プログラム>

1. IVUSA について
2. リスクヘッジについて
3. 危険予測活動について
4. 安全管理チェックシートの作成

NPO 法人国際ボランティア学生協会の深山恭介さんと立命館大学の杉村真子さんを講師に迎え、「ボランティア活動における実践的安全管理について」お話いただきました。

はじめに NPO 法人国際ボランティア学生協会について説明いただき、安全管理についてワークショップを交えながら講習を行っていただきました。

○リスクヘッジについて

リスクヘッジを考えるにあたり、まずは自分の夢・やりたいことを書き出すことから始めました。

そこから夢を阻むものを考え、それを解決する方法を考えていくことで危機(リスク)とは何か、安全管理の基本について考えていきました。

次に例題として清掃活動を行うとしたら、どのようなリスクヘッジを行えばよいかをグループで考えました。どのチームも同じ活動に対してリスクヘッジが異なりました。さまざまなリスクが活動に潜んでおり、1人だけで進められることではないことが感じられたのではないのでしょうか。

○危険予測活動について

近江楽座の団体の実際の活動写真を使い、その中にどんな危険が考えられ、自分たちであればどうするのが良いかを考えます。そこからリスクを回避するための目標を設定しました。同じ近江楽座の団体の写真を使ったグループワークであるため、普段の活動で気をつけなければいけないポイントをより身近に感じてもらうことができました。

○安全管理チェックシートについて

安全管理チェックシートは過去の事故や失敗を共有し、防ぐためにはどうすればよかったのかを

考え、これからに対して注意事項とアドバイスを書き出して作成していきます。今回は自分の経験に照らし合わせて考えていただきました。講習終了後には自分の安全管理チェックシートを作成した要領で、チームでの安全管理チェックシートの作成してもらいました。チームで安全管理チェックシートを作っていただくことでより安全に活動を進めていただきたいと思います。



IVUSA についてお話いただく



チームで話し合いリスクを書き出す



出しあった意見をグループごとに発表

Ⅱ 第二回 交通事故防止について

日時：2017年6月29日(木) 18:10～19:10

会場：湖風会館(A7棟) 会議室・談話室

講師：彦根警察署 交通課巡査長 西口しお里さん

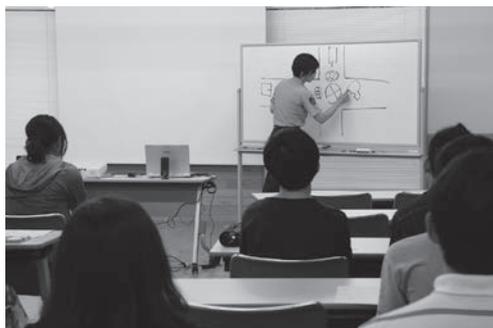
前半は実際の事例を踏まえながら、交通事故・交通ルールについてお話いただきました。自転車のお話もあり、よく利用する身近な乗り物なため、自分たちも気をつけて運転しなければならないと感じてくれたようです。

後半は交通事故を題材としたビデオを鑑賞しました。自動車、自転車の事故を扱ったもので、交通ルールの大切さを再認識できました。

よりいっそう交通ルールに気をつけながら活動を行っていってくれるのではないかと思います。



会場の様子



ホワイトボードを使い説明いただく

3-2 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」

活動のあしあと展
11月27日～11月30日
交流センター ホワイエ
観覧券が販売されます。

2017年度 近江楽座
中間報告会
11/14(火)～11/17(金)
各日18:10～(1時間半程度)
湖風会館[A7棟] 観覧室・会議室

Aつのグループに分けて開催します

この情報も、ご自分でもお楽しみ！
他のグループの発表や展示もぜひご覧になってください
※お申込みは、近江楽座のホームページから申し込みをお願いします

グループ①	グループ②	グループ③	グループ④
11/14(火) 18:10～	11/15(水) 18:10～	11/16(木) 18:10～	11/17(金) 18:10～
あかりんちゅ 未来看護塾 木興プロジェクト 木之本こじへいプロジェクト タクロバン復興支援プロジェクト	BAMBOO HOUSE PROJECT Harmony とよさらだ 廃棄物バスターズ Taga-Town-Project	とよさと快蔵プロジェクト スチューデント・キュレーターズ 座・沖島 田の浦FC学生ST 「なの・わり」 滋賀県大生き物研究会	信・楽・人 政所茶レン茶*ー かみおかべ古民家活用計画 おとくらプロジェクト 男鬼楽座 たけともミライ

プログラム

- 1 チームの活動報告 (1チーム15分、合計約30分)
前半の活動の要約をスライドと見せ、スライドを交えて発表します。
- 2 「活動記録シート」へのコメント (30分程度)
会場にあるチームの「活動記録シート」を見せながら、活動の振り返りや感想をコメントし合います。
- 3 コメントを共有 (30分程度)
決めたコメントカード一枚を共有し、共有します。

日 時：2017年 11月14日(火)～17日(金)

各日 18:10～19:40

会 場：湖風会館(A7棟) 会議室・談話室

参加者：約60名

前半の活動を振り返り、ノウハウを共有し、伝えることを目的として、中間報告会を開催しました。

<中間報告会日程>

	グループ①	グループ②	グループ③	グループ④
日 程	11月14日(火)	11月15日(水)	11月16日(木)	11月17日(金)
参 加 チ ー ム	あかりんちゅ	BAMBOO HOUSE PROJECT	とよさと快蔵プロジェクト	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
	未来看護塾	ボランティアサークル Harmony	スチューデント・ キュレーターズ	政所茶レン茶*ー
	木興プロジェクト	とよさらだ	座・沖島	かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
	木之本こじへい プロジェクト	廃棄物バスターズ	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	おとくらプロジェクト
	タクロバン復興支援 プロジェクト	Taga-Town-Project	フラワーエネルギー 「なの・わり」 滋賀県大生き物研究会	男鬼楽座 たけともミライ

1. 活動の振り返り、記録

チームが前半に行った活動を事業ごとにきちんとまとめることで、活動を客観的に振り返るとともに、活動を継続していく上で重要な「活動記録」をチームに残していきます。

2. 活動の過程・ノウハウを後輩に伝える。共有する

それぞれの世代やフィールドでメンバーが得た「学び」は、チームにとって、そして近江楽座にとっても、とても大きな財産といえます。

しかし、このような個人の「学び」は、意識しないと伝わることなく途絶えてしまいがちであり、現在一緒に活動している後輩や、これから活動に加わる後輩のために、それらのものを形にして伝えることが重要です。そして同時に、色々なチームの学びを共有して、後半の活動がより充実したものになっていく事を目指します。

<プログラム>

1. 各チームからの活動報告
2. 「活動記録シート」へのコメント
3. コメントの共有

Ⅰ 第一部 各チームからの活動報告

前半の活動を事業ごとにまとめ、スライドを写し出して発表します。どのチームも行った活動が多く、前半の活動だけでこれだけ多くの活動を行っていることに驚きました。活動内容がたくさんで5分では時間が足りないのではというチームも見られました。

またあるチームはその場で参加者に活動の成果物を振る舞ってくれたりと様々な報告がありました。



活動報告の様子



活動報告の様子



成果物のお茶をいただきながら報告を聞く

Ⅱ 第二部 「活動記録シート」へのコメント

第一部の活動報告を聞き、質問・共感したこと・感想など思ったことを付箋に書き出します。

会場の後方には前半の活動をまとめた「活動記録シート」をパネルに展示しており、書き終えた付箋は「活動記録シート」の隣に貼っていきます。



付箋にコメントを書き添えていく



「活動記録シート」が展示しているパネルに貼り付けていく

Ⅲ 第三部 コメントの共有

第二部で「活動記録シート」の隣に貼った付箋を全体で共有します。司会がコメントを紹介し、チームメンバーが補足をしたり、質問に答えたりしていきました。

4日間で次のような質問が寄せられ、チームが持つ悩みを共有しました。

活動地域について

チームによっては活動地域が遠かったり、行くまでの道のりが大変だったり、車がなければ不便だったり、それだけの時間と労力をかけて活動を行っていることに驚き、感心の声がありました。

メンバーの参加率について

メンバーの活動への参加率をあげるにはどんなことをしているかなど、イベントや会議でメンバーの参加がうまくいっているチームに質問が見られました。参加率や参加メンバーの固定化については多くのチームが悩むところのようです。

近江楽座間コラボについて

活動報告で何団体か行っていた近江楽座の他団体とのコラボについて聞く質問もありました。報告会は普段の活動ではなかなか知ることができない、他団体の活動について知る良い機会でもあります。活動を知ってこういったところでコラボできるのではないかと感じる人もいて、感想の中には何か一緒に活動をしたいというものもありました。また新たなコラボが生まれることを期待します。

まとめ

他の団体の活動について知ることができて刺激になった、チームの悩みは共通するところがあり参考になったといった言葉が聞かれました。

発表者の活動への思いを聞いて、刺激を受けた参加学生も多く、自分達の活動をより精力的に行いたいといった感想もありました。

中間報告会で感じたことがこれからの活動の参考になればと思います。



第三部 会場内でコメントを共有&質問回答



司会の学生が寄せられたコメントを紹介



司会の学生が質問しチームの代表が答える

| 活動のあしあと展

日時：2017年11月27日(月)～29日(水)

会場：交流センター ホワイエ

交流センターのホワイエにて活動のあしあと展を開催しました。

中間報告会で掲示した活動記録シートと各チームに寄せられたコメントを展示しました。



展示の様子



活動記録シートとコメントの書かれた付箋

3-3 活動報告会 まちづくり farmer's festa - まちをたがやす人たちの感謝祭 -



日 時：2018年4月21日(土) 9:30-16:00
 会 場：ナシエリア(人間看護学部棟食堂)
 参加者：約100名

学生たちが取り組んだ1年間の活動内容を発表し、「学生力」をいかした地域活性化の取り組み

<活動報告会 グループ分け>

	【パート1】9:45～11:10 <地域に学生がいること!>	【パート2】11:20～12:45 <学生だから出来ること!>	【パート3】13:45～15:35 <いろんな人とコラボすること!>
司 会	山崎泰寛(環境科学部)	柳澤淳一(工学部)	印南比呂志(人間文化学部)
チ ャ ム	とよさと快蔵プロジェクト	未来看護塾	あかりんちゅ
	信・楽・人	ボランティアサークル Harmony	BAMBOO HOUSE PROJECT
	座・沖島	スチューデント・キュレーターズ	政所茶レン茶 TM
	かみおかべ古民家活用計画	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	木興プロジェクト
	タクロバン復興支援プロジェクト	とよさらだ	廃棄物バスターズ
	Taga-Town-Project	木之本こじへいプロジェクト	おとくらプロジェクト
	たけともミライ	フラワーエネルギー「なの・わり」	滋賀県大生き物研究会
			男鬼楽座

について、大学が地域とともに考えていくことを目的に開催しました。支えていただいた地域の方々に感謝し、近江楽座の活動が持続・発展していきよう、多くの方々に参加していただきました。

<プログラム>

- 開会挨拶(印南委員長)
- 活動発表【パート1】、【パート2】
- 交流・ランチタイム
- 活動発表【パート3】、Bプロジェクト
- 活動写真アワード
- 全体総括(倉茂副学長、廣川学長)

【活動発表【パート1】 地域に学生がいること!】

全22のAプロジェクトを3つのテーマに分け、テーマごとにチームの発表6分、ゲストコメント・質疑応答6分の計12分の持ち時間で、活発な意見交換が行われました。

とよさと快蔵プロジェクトに対して、司会の山崎先生から、活動の長さが特筆している。建築のメンテナンスには色んな人の関わりが必要で、学生もいろんな学科のメンバーが参加している。リ

ニューアルの年にあたり、これからの活動の分岐点になるのではないかと。地域の方からは、学生の先進的な取組みが行政を動かし、空き家改修の補助金が出るようになった。毎年、継続して、変わることはない活動に感謝の言葉が述べられた。

信・楽・人に対して、地域の方から、信楽は製造している窯元が国道から離れているため、お客さんに製造現場まで足を運んでももらえない。そこで、ぶらり窯元めぐりという催しを13年前に始めた。10窯元からスタートして今は22まで増えた。始めて2～3年後から、信・楽・人に手伝わってもらっている。私たちの手が回らないインフォメーションや道案内など地元の方が気づかないところをみてもらって、新しい活動を組み込んでもらっている。すごくありがたい。信楽は交通の便が悪いので、安く泊まれて活動できる場所など、援助してもらえるとありがたいと要望された。

座・沖島に対して、地域の方から、私たちも他の地域と同様、沖島の振興に関して県立大学の学生がなくてはならない存在になっている。学生が実際に島に住んでおり、よく飛び込んで来たなど感心している。島の人たちからも大事にされている。すごい活気を与えて下さっている。私たちと一緒に末永くお手伝いしていただけたらとコメントいただいた。



開会挨拶

かみおかベ古民家活用計画に対しては、山崎先生から、食がコミュニケーションの手段になっていること、まちの方々との距離感が近いことなど、ユニークだと感じた。また木興プロジェクトとのコラボ企画だったり、横のつながりを広げていることも、新しい方向性を示しているとコメントいただいた。

タクロバン復興支援プロジェクトに対しては、現地にどっぷり入り込んでやっていることがよく伝わってきたという感想や、学生や現地の人が何人ぐらい関わっているのか、1年のうち何ヶ月くらい現地に滞在しているのか、継続という意味で、どれくらい後輩を育てているのかという質問があった。

Taga-Town-Project に対しては、盛沢山の活動を行っている。食が重要なテーマになっているが、何か課題認識があるのかという質問があった。一郷土食を若い人に伝えていきたいというお母さん



質問に答える発表者（タクロバン復興支援プロジェクト）



会場からの質問（印南先生）

たちの声があり、取り組むことになった。レシピ集の動画をつくったが、好評だったので、今後、公開していきたい。

たけともミライに対しては、建物の解体をしなければいけない時期にきている。前向きに捉えて、何か違った形で残っていくような活動になればよいのかなというコメントをいただいた。他のプロジェクトの学生からは、人の記憶は年々薄れていくのに対して、毎年活動してきた記録を残していくことができれば何か力になるのではないかと、建築学科だけでなく他の学科の学生とも交流して取り組む可能性もあるのではないかと提案があった。

全体を通して、学生が地域に入るということが、短期間でも時間の密度という点で深みのある活動になっている。拠点を持って活動するというのはそこで長い時間過ごすことで、責任のようなものが出てくる。また継続するということがどういふことなのか、重要になってくる。モノを手掛かりに活動していると、補修したり、時間がかかるので、関わり方を考えざるを得ない。そこに近江楽座が関わっていく重要な手掛かりがあるのではないかと、まとめがあった。

さらに、沖島に学生が関わることと関連して、島から他に出ている若い人たちとの関わりも考えるきっかけになっているとの報告があった。



地域の方のコメント（座・沖島）

<地域ゲスト>

- 岡村博之さん (NPO 法人 とよさとまちづくり委員会 副理事長)
- 奥田泰央さん (窯元散策路の wa 代表)
- 小川文子さん・富田雅美さん・本多有美子さん (沖島離島振興推進協議会)

| 活動発表【パート2】学生だから出来ること！

未来看護塾に対して、地域の方から、入院している子どもたちが学生さんと接することで表情がとても豊かになる。来ていただけるのはすごくありがたい。病院以外でも幅広い地域活動をされていることがよくわかった。卒業されたら、是非、就職してほしい。司会の柳澤先生からは、プロにはできない学生だからできる活動をやっていて、ずっと続けてきたというのがすごい。そのためにはマンネリ化することなく、いろんな活動をやってほしいとコメントがあった。

ボランティアサークル Harmony に対して、地域の方から自分の子どもの生活能力がすごく上がった。余暇活動の楽しい場所を提供していただけた。自信を持って外に出ていけるような子どもに育てていただけた。すごくありがたい。メロディーを立ち上げたのは 17 年前。Harmony を立ち上げてもらってから 16 年になる。障害者も普通の暮らしをする



地域の方のコメント（未来看護塾）

という目標が少しずつ達成できている。学生さんの手を借りて子どもたちを育てるという気持ちはずっと変わっていない。これからも学生さんが楽しかったと思ってもらえるような活動をしていきたい。卒業した学生も結婚報告とか出産報告とかで来てくれるので、嬉しい。

スチューデント・キュレーターズに対して、印南先生から県や市町の教育委員会は人手不足で、多くの文化財が捨てられたり、眠っている。学生は、そのような文化財を分類整理して研究のスタイルをつくっていくことができる。学生だからこそ、重要な活動であり、地域資源を守っていく上ですごく大事な役割を担っているとコメントをいただいた。

田の浦ファンクラブ学生サポートチームに対して、倉茂先生から高齢化について一人暮らしのお年寄りとか多いのかと質問があった（多いが、地域のつながりは強い）。全国共通の課題で、まさに自分のこととして聞かしていただいた。君たちはすごいことをやっているんだなと思ったとコメントいただいた。

とよさらだに対して、地域の方から地域で活動する上で自分たちの殻に閉じこもっていないで、僕たちここで活動していますよというアピールするとよい。周りの人たちも気にしている。一言声をかけていただけたら、いろいろ協力してくれる。失敗しても学生がやりおったこと。うまくいったら、さす



パート2の活動発表（司会の柳澤先生）



町並み調査の成果物である連続立面図を披露
（木之本こじへいプロジェクト）

が学生やから出来るんだねとってくれる。地域の人間をどんどん活用してくれたらよいとアドバイスいただいた。

木之本こじへいプロジェクトの発表では、北国街道の町並みを調査して描いた建物の連続立面図が披露され、地域の方から若い学生のアイデアを地域にどんどん提案してもらいたい、活動に期待しているとコメントをいただいた。

フラワーエネルギー「なの・わり」に対して、畑をお借りしている農家の方からの活動へのアドバイス・メッセージが伝えられた。また畑での栽培の様子（冬から春にかけて菜の花、春から夏にかけてヒマワリを栽培）や小学校への出前授業の内容、生徒の反応等について質問があった。かつて小学校への出前授業と一緒に参加した経験がある近江楽座OBから、子どもたちが目を輝かせながら聞いていたのが印象的だったので、今後も是非続けてほしい。中学校や高校にも広げてもらったら、活動の幅も広がるのではないかとアドバイスいただいた。

全体を通して、プロになる前、就職する前、学生だから出来ることがあると思う。自分たちの力を発揮して、これからも活動してほしいと、まとめがあった。

<地域ゲスト>

- 橋本宏美さん（彦根市立病院4B 棟看護科長）
- 田井中雅子さん・藤堂裕美さん（NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー）
- 川島光男さん（白谷荘歴史民俗博物館）
- 森久仁彦さん（エコファーマー）
- 植田淳平さん（長浜生活文化研究所）

｜ 交流・ランチタイム

昼食は、エコファーマーの森さんがつくったお米を使って学生たちがにぎってくれたおにぎり、伊丹先生の方から田の浦のワカメが入った伊丹スープ、木之本つるやパンさんからラスク、政所茶レン茶[®]ーからお茶が提供され、地域でつくられた食べ物をおいしくいただいた。また、おとくらプロジェクトからコーヒーの出前カフェがあるなど、参加者同士が交流しながら楽しくにぎやかな時間を過ごすことができた。



地域の方との懇談（スチューデント・キュレイターズ）



ランチタイムの様子



ランチタイムのおにぎりの準備風景

｜ 活動発表【パート3】 いろんな人とコラボすること！

最初に、近江楽座学生委員会からBプロジェクトとして実施している「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」の取り組みについてのプレゼンがあり、共同利用できる楽座ルームについて紹介していただいた。

引き続き活動発表に移り、あかりんちゅに対して、司会の印南先生から、ものすごいスケジュールでイベントをこなしていると思う（昨年、私たち1回生が活動を引き継いだため、ペースがつかめるまで時間がかかり、後期にやっと軌道にのった）。今年、10年目を迎える団体で、Sプロジェクトと言って、近江楽座からの活動資金の助成はなく、自分たちで稼ぎながら活動している。是非ノウハウを聞いてみて下さいと。会場から、何で儲けているのかと質問があった（イベントの依頼料が主な収入）。—こういう形で地域や企業とつながっていくのがいいですね（印南先生）。

BAMBOO HOUSE PROJECT に対して、司会から全国的に課題になっている竹林の管理に一石を投じるプロジェクトで、特に風景をつくり出しているというのが非常に魅力的に感じる、子どもたちの記憶にも残っていくとコメントがあった。地域の方

からは、まちづくり委員会の活動として竹林整備を行っているが、高齢者が多い中で若い人の力が借りられるというのは非常に助かっている。会場からは、地元なので、こういう形で子どもたちの遊ぶ場所ができてるのは嬉しいとコメントがあった。

政所茶レン茶[®]に対して、地域の方から学生だからできることについて、一つはほうじ茶。地域では全く昔のやり方を変えずにやってきた。何年も通ってきてくれた学生が、「ほうじ茶どうですかね」と言ってくれたからこそ、「じゃ、やってみな」と言ってくれたんだと思う。これまでがんばって活動してきた、提案したからこそ、出来たこと。もうひとつは、学生が東京に行って政所茶を販売したこと。みんなが政所茶の価値を上げてきている。地元の方は「お茶づくり、しんどいわー」と言っているが、学生の楽しそうな声とか聞くと、私たちが守ってきた政所茶は若者にとって、おもしろいことなのかもしれない、ということに気づきはじめています。だからこれからも、いろんなことに学生だからできるチャレンジをしてほしいとメールを送ってもらった。一地域に気づきをもたらすような活動だったというのはいい言葉ですね（印南先生）。上田先生から、今年大きかったのは、政所の振興会が出来て、そのメンバーに入ってほしいと言われたこと。気づき、蟻の一穴かもしれないけど、そこから変わっていく



発表に対する学生からのコメント

んだなと思える働きをしてくれたのが嬉しい。

木興プロジェクトに対して、印南先生から、近江楽座が始まった頃、チーム同士のコラボがもっともっと出来るとよいと期待していた。木興プロジェクトは様々なチームや地元の人、他大学、いろんな人たちのコラボが誘発されている。近江楽座が求めていたプロジェクトになっていっている。鶴飼先生から、建築の学生はつくるものがなくなると存在意義がないみたいに感じるらしいが、つくるものを自分たちで考えてみるのが勉強になると思う。自分たちで道を切り拓いていくことを楽しんで、田の浦に行ってもらえるといい。先輩たちが足場を固めてくれて、地域との信頼関係も築かれている。地域に提案できるようになると楽しいと思うと。

廃棄物バスターズに対して、彼らは清掃活動とか、すごい地域貢献活動をしているが、メインは廃プラのリサイクルをテーマにした活動との司会のコメントがあり、徳満先生から、我々はリサイクルプラントを生み出し雨水タンクに移行していこうとしているが、そこには大きな技術的ギャップがある。彼らはその解決にもがき苦しんでいる。それが彼らの意気込みだというふうに感じてもらえたらありがたい。一数字でものを言う学生が地域で活動するというのはすごく重要なことだと思う（印南先生）。



地域の方のコメント（おとくらプロジェクト）

おとくらプロジェクトに対して、地域の方から、おとくら応援隊として、いっぱい活動を応援していると思っている。おとくら寄席とか、学生がいろいろ企画してくれているので、これからもよろしくをお願いします。また、中山道高宮宿でも空き家が増えており、同じような活動の場が増えていくことを願っていると。会場から、大学にいろんな国から交換留学生が来ているので、彼らの視点も何かヒントになるのではないかと提案があった。

滋賀県大生き物研究会に対して、会場から、特に在来魚のことを子どもたちにきちんと伝えていく活動をしている。現地で調査した最新のデータを教育普及に活かしている。本当にありがたい。これからも期待しているとコメントをいただいた。

男鬼楽座に対して、濱崎先生から男鬼以外にも茅葺きの民家をなんとかしてほしいという声があり、活動地域が広がっている。地縁ではなく新しいボランティアな結(ゆい)をつくって、コストを下げる。茅刈りについても、伊吹山の伝統的な景観で草刈場がある。伝統的な景観を残しながら茅ネズミなどの動物が棲める環境を守る活動をしている。うちだけでは限界があるので、大学の枠を超えて、伝統的なものを守っていききたいとコメントがあった。

全体を通して、これだけ多様な分野の地域活動の取り組みは、なかなかないのではないかと。また、いろんな専門の学生がコラボすることで、また新しい活動が生まれてくると、まとめがあった。

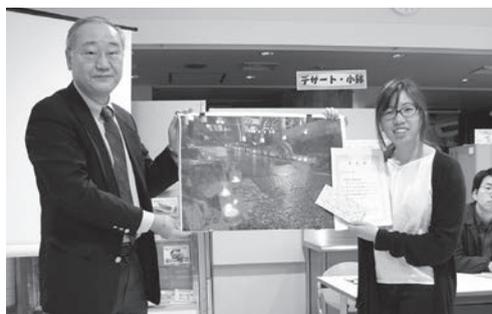
<地域ゲスト>

- 浅井基義さん(菩提寺まちづくり協議会地域活性化委員会 委員長)
- 丸山紗千代さん(政所茶縁の会)
- 加藤義朗さん(おとくら家主)

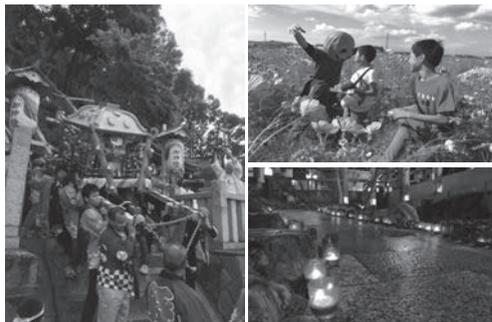
活動写真アワード

各プロジェクトの年間の活動写真の中から、2017年近江楽座活動写真アワードとして、次の3団体の活動写真が選ばれ、廣川学長から表彰と副賞の授与があった。

- あかりんちゅー OKB キャンドルナイト
- とよさと快蔵プロジェクトーこすもすパンプキンフェスタ
- 座・沖島ー春の大祭



廣川学長より表彰と副賞の授与(あかりんちゅ)



受賞写真

左：座・沖島、右上：とよさと快蔵プロジェクト
右下：あかりんちゅ

全体総括

(倉茂副学長)

近江楽座にはいろんなグループがあって、お互いがお互いをサポートし合っていることがよくわかった。滋賀県立大学の近江楽座は、よその大



倉茂副学長の総括コメント

学が真似をしようとしても出来ない。うちは何故これだけ続けているのかな。君たちの熱意であったり、サポートする先生方の力であったり、何より地域の人たちに愛されるようになってきている。地域の人たちに育ててもらっている。それを君たち自身が、自分たちの喜びだと感じられている。これが最も大きなモチベーションだと思う。また、最近は海外の大学の目が君たちの地域の活動に向いてきている。日本人の地域社会の中に入って活動を体験させてもらえないか、というオファーが届き始めている。君たちと一緒に活動させていただくような可能性もあるかもしれない。

(廣川学長)

今日は朝一番から全ての発表を聞かせていただき、活動のすばらしさに感動している。全国の公



廣川学長の総括コメント

立大学の集まりの中で滋賀県立大学の近江楽座はすごく有名。他の大学も同じようなことをしたいが、なかなかうまくいかない。うちは単位を上げていないという話をすると、みなさん驚かれる。学生たちが地域の方々からすごく理解していただいている。すごく可愛がっていただいているのが、今日の報告会でよくわかった。

まず、地域の方々に本当に感謝したい。学生たちを温かく受け入れていただいて、2004年から14年間。その時間の蓄積がすごく重要で、その上に信用を得て、変遷してきている。プロジェクト同士のコラボも進んできている。これも蓄積の上でできること。それから、ひとつのプロジェクトでも、いろんな活動の断面にある。続けることも重要だし、チャレンジして自分なりに変えるということも重要。そのことを理解してほしい。変えることを怖がらずに取り組んでほしい。では大学は何をするか。サポートをどうするかが重要。新たな段階として、どういう形のサポートをしていくか、これから考えていきたい。皆さんも学生目線でいろいろ意見を出してほしい。

大学での学びと地域での活動をリンクさせていることもよくわかった。自分の学びを生活の中でどう生かしていくか。卒業後の生きる力を育てている。是非、友達をさそって、さらにメンバーを募ってほしい。



集合写真

｜ 活動成果展示会

日時：2018年4月16日(月)～20日(金)

9:00～17:00

会場：交流センター ホワイエ

交流センターホワイエにて、全チームの活動報告展を開催しました。活動を新聞形式にまとめた「楽座新聞」や各チームの成果物、活動紹介パネル、写真やアルバム等が展示されました。

今回は活動写真展を同時開催し、2017年度の活動で撮影した写真を各チーム3枚を厳選して展示しました。

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会「楽座市」



"近江楽座や近江楽座チームをもっと知ってもらおう!"、"活動に興味を持ってもらおう!"という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、10の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。

| 学生委員会とは

近江楽座をさらに推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

| 楽座市

日 時：2017年4月20日(木)、21日(金)

16:30~18:30

会 場：交流センターホワイエ

開催内容：

- ブース相談会
- 2016年度全チームの活動報告新聞の展示

<参加チーム>

- ・とよさと快蔵プロジェクト
- ・信・楽・人-shigaraki field gallery project-
- ・政所茶レン茶[®]
- ・ボランティアサークル Harmony
- ・スチューデント・キュレイターズ
- ・座・沖島
- ・かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- ・とよさらだ
- ・おとくらプロジェクト
- ・Taga-Town-Project

それぞれのチームがブースをかまえて、自分達の活動について説明を行いました。新入生が多く参加しており、先輩である近江楽座の学生から近江楽座の説明だけでなく、学校生活のアドバイスも受けている場面が見られました。学校生活をおくりながら、近江楽座の活動をしていくイメージが得られたようでした。

法被を来てアピールするチーム、実際に活動の中で制作したものを使いながら説明を行うチームなどいろんなチームがありました。

実際に成果物を見て、触ってもらったり、あるチームはお茶を飲んでもらったりしながら、新入生や在校生に活動を知ってもらう機会になりました。



会場の様子



ブース相談会



参加者に成果物のお茶を振る舞う



楽座新聞を眺める参加者

4-2 オープンキャンパス

日 時：2017年7月22日(土)、23日(日)

9:00～15:00

会 場：交流センターホワイエ

オープンキャンパスにて、近江楽座の紹介を行いました。近江楽座で活動を行う学生がブースに立ち、来場いただいた方に近江楽座について自分の体験を交えて説明してくれました。

親子で関心を持っていただき、真剣に話を聞いてくださいました。

開催内容：

- 学生による活動紹介、相談会
- ムービーでの活動紹介
- 活動展示

<参加チーム>

- ・ 学生委員会
- ・ 政所茶レン茶[®]ー
- ・ スチューデント・キュレーターズ
- ・ 座・沖島
- ・ かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY-
- ・ とよさらだ
- ・ おとくらプロジェクト
- ・ Taga-Town-Project



会場の様子



来場者に学生が活動説明を行う

4-3 B プロジェクト「県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト」

近江楽座学生委員会が中心になって、滋賀県と共に取り組むBプロジェクトとして県営住宅の空き住戸を活用して地域のコミュニティの活性化を図る取り組みを進めています。

活動の一つの柱がシェアハウス。学生が実際に暮らしながら地域と関わる活動ができるよう、生活の場をつくること。もう一つが、学生活動の拠点「楽座ルーム」をつくることです。ミーティングや作業、情報共有、発信ができる環境を整備しながら、新たな活動を模索しています。

1 シェアハウス

2戸に学生が入居し、シェアハウスとして活用しました。草むしりや階段掃除等の自治活動に参加。草むしりは団地に入居されている方が多く参加される為、コミュニケーションを取る機会となりました。団地での決まり事についても草むしりに参加する中で、入居されている方とお話しながら教えていただくことができました。

1 活動拠点「楽座ルーム」

近江楽座で活動するチームの共有スペースとして整備。ミーティングやイベント準備、備品管理等で利用しました。

1 X'mas 手作りキャンドル教室&ハンドベル演奏会

日 時：2017年12月17日(日)

13:00～16:00

場 所：楽座ルーム、自治会館

企 画：近江楽座学生委員会・あかりんちゅ

あかりんちゅが楽座ルームにて「X'mas 手作りキャンドル教室&ハンドベル演奏会」を開催し、約20名の地域の方に参加いただきました。

楽座ルームで手作りキャンドル教室を行い、自治会館ではハンドベルの演奏を行いました。

キャンドル教室もハンドベル演奏もあかりんちゅが普段から行っている活動で、地域の方に楽しんでいただきながら、近江楽座について知っていただくきっかけとなりました。

あかりんちゅ presents!!!

X'mas 手作りキャンドル教室 & ハンドベル演奏会

手作りリサイクルキャンドルで環境再生中心に活動している近江楽座のプロジェクトチーム「あかりんちゅ」が、手作りキャンドル教室を開催!!!

さらに近江からは自治会館でハンドベル演奏会も♪♪

今年のクリスマスは普段行っていない集まりを通して、手作りキャンドルの作りで過ごす「エコでスローな夜」にしませんか？

12月17日(日) 対象 6才～
13:00～18:00 文字で参加OK!

手作りキャンドル教室
13:00～16:00 @B2301 楽座ルーム
参加費：100円 (キャンドル2つ+持ち帰り袋)

ハンドベル演奏会
17:30～18:30 @自治会館
参加費：無料！お楽しみにどうぞ♪

What's sakarinchu? あかりんちゅって？

滋賀県立大学近江楽座プロジェクトチームでお寺などからいただいた廃棄ろうそくを再利用し、リサイクルキャンドルを作成し、キャンドルナイトやキャンドル作り教室、さらにハンドベル演奏会などを行っています。普段つけている電気を消して、キャンドルの灯りで過ごす「エコでスローな夜」を堪能しようと考えています。あかりんちゅは近江楽座の中で唯一のプロジェクトであり、私たちが行ったキャンドルナイトで集った資金、楽座などでの活動費を蓄えています。イベント開催、自治会などには随分助けられています。

📧 sakarinchu@gmail.com 📱 @sakarinchu_up

主催・あかりんちゅ 近江楽座学生委員会
協力・近江楽座事務局

イベントチラシ



手作りキャンドル教室

5 他大学等との交流

5-1 輔仁大学との交流

台湾・輔仁大学が実施する滋賀県の里山文化体験スタディツアーの一環として、7月14日(金)に滋賀県立大学の近江楽座との交流会を開催します。近江楽座の学生たちが活動する現場見学や、お互いの活動報告・交流を行います。関心のある方はぜひ参加ください。

輔仁大学は、3つの学部(文芸学・社会学・工学部)と、1つの大学院(文学研究科)を擁する総合大学です。2015年、滋賀県立大学と提携し、交流促進のための国際交流センターを設立しました。

■会場
現地見学/豊郷町高宮町、豊郷町吉田
交流会場/滋賀県立大学 交流センター(豊郷町1-3)
交流/「ティー/人」豊郷町高宮町(「茶」エリア)

■プログラム
9:45~11:00 現地見学I(豊郷町高宮町「ギャラリー-喫茶-おとくら」)
・近江楽座の紹介
・活動プロジェクトの紹介(20分)
11:30~14:00 現地見学II(豊郷町吉田周辺)
・とよさと快蔵プロジェクトの改修物件見学
昼食・酒蔵見学

■参加申し込み方法(お問い合わせ)
氏名、所属を下記連絡先までお知らせください。
締切:7/11(火)12:00まで
近江楽座事務局・地域連携推進グループ
TEL: 0749-28-8516 (FAX: 8516)
E-mail: info@johmsakuzen.net 単【】→単

日 時: 2017年7月14日(金)

場 所: 滋賀県立大学

彦根市高宮町 喫茶おとくら(座・楽庵)
豊郷町吉田周辺

台湾・輔仁大学が実施する滋賀県の里山文化体験スタディツアーの一環として、7月14日(金)に滋賀県立大学の近江楽座との交流会を開催しました。近江楽座の学生たちが活動する現場見学や、お互いの活動報告・交流を行いました。

<プログラム>

1. 活動現場見学I(おとくらプロジェクト)
2. 活動現場見学II(とよさと快蔵プロジェクト)
3. 交流企画・活動報告
4. 交流パーティー

1. 活動現場見学(おとくらプロジェクト)

面矢先生が英語で近江楽座全体について紹介した後、おとくらプロジェクト代表の岡田さんが活動紹介をしてくださいました。発表後にはおとくらの運営についてや、プロジェクトの始まりについてなどに質問があり、活動に興味を持っていただけたようでした。

その後、ギャラリー部分も見学していただきました。この時開催されていた展示は書道で、展示されていたものを書いたメンバーも参加していたので、ギャラリーの話題でも盛り上がっていました。



喫茶おとくら見学

2. 活動現場見学II(とよさと快蔵プロジェクト)

とよさと快蔵プロジェクトが改装した満ち家にてプロジェクトの紹介を行い、その後今まで改装を行った建物を見て回るまちあるきを行いました。



豊郷町をまちあるき

プロジェクト紹介は代表の高田さんが行っていただきました。プロジェクトのOBの方も参加していただき、活動されていた当時のお話もしていただきました。

まちあるきでは改装を終了し、活用を行っている建物から、今まさに改装中のところまで見て回りました。中でも蔵に興味を持ち、写真を撮影している方が多かったです。景観デザイン学科の学生が中心ということもあり、日本の建築を熱心に見ておられました。

3. 交流企画・活動報告

アイスブレイクとして輔仁大学の学生と近江楽座の学生の混合チームでスイカ割りを行いました。スイカを割る役になった学生に味方のチームも敵のチームも声をかけて、とても盛り上がりました。



交流企画（スイカ割り）



交流パーティー

近江楽座から4団体、輔仁大学から3団体が活用報告を行いました。活動報告10分、質疑応答5分で、英語を使って交互に発表しました。

それぞれ写真や動画を駆使して、自分たちの活動を説明していただきました。

4. 交流パーティー

ナシェリアにて開催しました。活動報告も終わり、互いに緊張が溶けた様子でした。

名前を中国語で発音したらどうなるかなど、楽しそうな様子で交流が行われていました。

最後には参加者全員で集合写真を撮って終了しました。



集合写真

 **情報発信**

6-1 ホームページ、プロジェクトレポート、リーフレット

| 近江楽座ホームページの運営

URL : <http://ohmirakuza.net/>

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトでもある近江楽座ホームページの運営を行い、随時最新情報を更新しています。

<追加コンテンツ>

○ 楽座文庫

過去の近江楽座プロジェクトの成果物を追加

| プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。本年度は計2号発行。3チームの活動を取材しました。発行したレポートは、学内食堂前にある近江楽座掲示板に掲示。近江楽座のホームページにも掲載しています。

<2017年度プロジェクトレポート>

○ [とよさと快蔵プロジェクト・とよささらだ]

○ [Taga-Town-Project]



プロジェクトレポート
(第1号：とよさと快蔵プロジェクト・とよささらだ)
(第2号：Taga-Town-Project)

| 活動紹介リーフレット2017

デザイン：廣瀬奈々

取材協力：学生委員会

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取り組みや、本年度近江楽座に採択されたAプロジェクト22件とBプロジェクト1を写真入で紹介するリーフレットを作成しました。近江楽座OB・OGにインタビューした「-VOICE-先輩の声」では学生委員会が取材を行いました。



近江楽座活動紹介リーフレット2017

7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者

滋賀県立大学理事長 廣川能嗣

事業推進責任者

近江楽座専門委員会 委員長 印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部

浦部美佐子

林宰司

村上修一

金子尚志

迫田正美

工学部

河崎澄

柳澤淳一

人間文化学部

石川慎治

武田俊輔

印南比呂志

佐々木一泰

細馬宏通

人間看護学部

伊丹君和

横井和美

地域共生センター

鵜飼修

近江楽座事務局

秦憲志

前川瑛美梨

高谷美穂

※ 2017年度(平成30年3月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日 時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2017.12.22	あかりんちゅ・県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト	中日新聞	地域の交流 県立大生が力に 開出今団地に部屋借り活用
2	2017.8.6	未来看護塾	彦根 JC 月報 8月号	まちづくり!@ひこね 未来看護塾編
3	2017.10.13	とよさと快蔵プロジェクト	広報とよさと	どろんこまつり～どろんこになりました～
4	2017.2.21	政所茶レン茶`ー・とよさらだ他	滋賀県立大学キャンパス MOVIE	地域に学ぶ近江楽座
5	2017.7.6	ボランティアサークル Harmony	彦根 JC 月報 7月号	まちづくり!@ひこね 障がい児・者 自立支援・共生社会プロジェクト Harmony 編
6	2017.11.25	ボランティアサークル Harmony	株式会社 ZTV 彦根放送局	クリスマスコンサートの取材
7	2017.11.26	ボランティアサークル Harmony	中日新聞	演奏や合唱 障害者楽しんで 県立大生らコンサート
8	2017.11.26	ボランティアサークル Harmony	京都新聞	障害者と市民、音楽で交流 県立大でクリスマスコンサート
9	2017.11.27	ボランティアサークル Harmony	おうみ!かわら版(びわ湖放送)	クリスマスコンサート(吹奏楽部)の取材
10	2017.10.6	スチューデント・キュレイターズ	彦根 JC 月報 10月号	まちづくり!@ひこね スチューデント・キュレイターズ
11	2017.4.21	座・沖島	京都新聞	地域の未来に若者の力 県立大生沖島移住へ
12	2017.4.25	座・沖島	産経新聞	沖島活性化へ大学生移住 近江八幡市
13	2018.1.1	座・沖島	読売新聞	新旧の島民 描く未来
14	2017.6.6	かみおかべ古民家活用計画-SLEEPING BEAUTY-	彦根 JC 月報 6月号	まちづくり!@ひこね かみおかべ編
15	2017.8.1	菊池瞳(田の浦ファンクラブ学生サポートチーム)	中日新聞	県立大生 震災復興に力 宮城で6日「海の大運動会」
16	2018.3.11	田の浦	滋賀民報	3.11 キャンドルナイト開催について
17	2017.5.7	とよさらだプロジェクト	彦根 JC 月報 5月号	まちづくり!@ひこね とよさらだプロジェクト編
18	2017.10.12	木興プロジェクト	三陸新報	学生が鳥居を再建
19	2017.7.6	廃棄物マスターズ	びわ湖放送	"廃棄物マスターズ活動紹介 雨水タンク PR およびモニター募集"
20	2017.10.8	フラワーエネルギー「なの・わり」	中日新聞	子どもたち作ってみた 長浜で実験教室 手でボンボンと弾むシャボン玉
21	2017.5.15	おとくらプロジェクト	広報ひこね	彦根歴史探訪とアートナビ
22	2017.7.2	おとくらプロジェクト	中日新聞	生命の表現作品に
23	2017.7.8	おとくらプロジェクト	中日新聞	碑文の臨書大作堂々
24	2017.9.8	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	高宮・不破邸見学&ギター演奏 10日
25	2017.12.2	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	桂三之助&小留 おとくら寄席 3日
26	2018.1.12	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	並河富美代展 13日から開催
27	2018.1.17	おとくらプロジェクト	しが彦根新聞	芹川けやき 彦根城柳の絵

No	日時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
28	2018.1.19	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	「風」や「樹」を自在に描く
29	2018.2.10	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	絵画の“トンネル”も作品
30	2017.3.6	おとくらプロジェクト	彦根 JC 月報 3月号	まちづくり!@ひこね おとくら編
31	2017.4.6	Taga-Town-Project	彦根 JC 月報 4月号	まちづくり!@ひこね Taga-Town-Project 編
32	2017.7.10	Taga-Town-Project	DADA Journal- 滋賀県湖東・湖北の地域情報紙	「半月舎だより10」高宮で
33	2017.11.1	Taga-Town-Project	広報たが	「多賀の食文化」を探る(4)……「おとりこし」の食
34	2017.8.3	県営開出今団地コミュニティ再生プロジェクト	中日新聞	学生ら呼び込み県営住宅活気を 自治会参加条件に貸し出し
35	2017.7.19	近江楽座・おとくらプロジェクト・とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	台湾の学生興味津々 古民家活用の街づくり活動 彦根と豊郷県立大生が紹介
36	2018.3.13	近江楽座	新潟大学	近江楽座の取り組みを視察

公立大学法人 滋賀県立大学
スチューデントファーム「近江楽座」
まち・むら・くらしふれあい工舎

2017 年度活動報告書

平成 31 年 3 月発行

発行	公立大学法人 滋賀県立大学 地域共生センター 〒 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 TEL. 0749-28-8616 FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	前川瑛美梨

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：<http://ohmirakuza.net> をぜひご覧ください

近江楽座
まち・むら・くらしみれあい工舎